

平成元・2年度

小 阪 里 中 遺 跡

第2・3次発掘調査概報

平成2年度

千 代 遺 跡

第1次発掘調査概報

1992

田原本町教育委員会



小阪里中遺跡第3次調査地遠景(南から)

序

奈良県田原本町の歴史は2000年を数え、古代、中世、近世とそれぞれの時代の文化を育成し、古いものと新しいものとが並存接合して今日の田原本町を形成されております。

今、この文化遺産を再認識しなおす時期と後世に伝えねばならない責務を痛感しております。

今回、平成元・2年度におこないました「小阪里中遺跡」、「千代遺跡」の発掘調査の成果を概要にまとめ、このたび発刊いたしましたので、ご高覧いただき当発掘調査にご指導、ご支援を賜りますようお願いいたします。

終わりに、この調査にご協力をいただきました土地所有者、さらに本書の編集にあたり御教示賜りました先生方に厚く御礼申し上げます。

平成4年3月

奈良県 田原本町教育委員会

教育長 岩井 光 男

平成元・2年度

小 阪 里 中 遺 跡

第 2 ・ 3 次 発 掘 調 査 概 報

例 言

1. 本書は、旭食品株式会社代表取締役 竹内三賀男氏の依頼により奈良県磯城郡田原本町小阪300-1番地他において実施した配送センター新築に伴う事前発掘調査（第2次調査）、ならびに名阪開発株式会社代表取締役 仲谷圭治氏の依頼により、同田原本町小阪289-1番地他において実施した分譲住宅建設に伴う事前発掘調査（第3次調査）の2件の概要報告である。

2. 現地調査及び概報作成は以下の関係者でこなった。

[現地調査]

田原本町教育委員会
教育長 岩井光男
教育次長 古川周伯
教育参事 岩井重幸（第3次調査）
文化財保存課 課長 森口 淳（第2次調査）
" 書記 中村佳三
" 技師 藤田三郎（第2次調査現地担当）
" " 北野隆亮（第3次調査現地担当）

[概報作成]

田原本町教育委員会
教育長 岩井光男
教育次長 岩井重幸
文化財保存課 課長 石橋一晃
" 補佐 小西敏夫
" 書記 中村佳三
" 技師 藤田三郎
" " 北野隆亮

3. 調査にあたっては、旭食品株式会社代表取締役 竹内三賀男氏ならびに名阪開発株式会社代表取締役 仲谷圭治氏より多大な御理解と御協力を賜った。なお、第2次調査の現地にあつては村木建設株式会社民間第二事業部建築工事事務所所長 山岡 栄氏の手をわずらわせた。

4. 調査補助員としては以下のものが参加した。

中島明美（立命館大学学生）（第2次調査）

貫代寛典（関西大学学生）、酒井大地（奈良大学学生）（以上第3次調査）

出上遺物の整理にあつては豆谷和之（山口大学大学院OB）、坂梨咲子、高橋知子（以上奈良大学学生）、及び末広真理子、中谷利枝、福島加代子の各氏の手をわずらわせた。

発掘作業にあつては下記の方々に参加した。

[第2次調査]

中谷義弘、田辺 寛、末広利雄

[第3次調査]

中谷義弘、田辺 寛、植中次郎、中居義喬、森 勇、山本忠雄、吉井利和、中西幸子、中西智子

なお、第3次調査の現地発掘作業にあつては桜井市教育委員会 清水真一氏に多大な御援助を受けた。記して感謝の意を表します。

5. 概報作成にあたり、橿原市教育委員会 竹田政敬氏から有益な御教示を賜った。記して感謝の意を表します。

6. 本概報の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅳを北野が、Ⅲを藤田が担当し、編集は北野がおこなった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 第2次調査の概要	
1. 調査契機と経過	4
2. 調査の全容	4
3. 遺構	5
(1) 層序	
(2) 遺構	
弥生時代の遺構	
SK-104, SK-105, SD-101, SD-102	
古墳時代の遺構	
SK-101, SK-102, SK-103	
中世の遺構	
4. 遺物	8
(1) 土器	
5. まとめ	8
IV. 第3次調査の概要	
1. 調査契機と経過	10
2. 調査の全容	10
3. 遺構	10
(1) 層序	
(2) 遺構	
SX-01, SD-01, SD-02, SD-03, SD-04・05	
4. 遺物	16
(1) 土器	
SX-01出土土器, SD-01出土土器, SD-02出土土器	
5. まとめ	18

I. はじめに

小阪里中遺跡は昭和61年度に田原本町小阪230-3番地他が調査面積1300㎡で当町教育委員会の手によって初めて発掘調査（第1次調査）がおこなわれた。その結果、弥生時代の土坑や古墳時代の直径21.5mの円墳1基、中世から近世にかけての大溝・土坑・井戸など寺院・屋敷跡に関する諸遺構が検出され、小阪里中遺跡の性格の一端が知られるようになった。

遺跡は田原本町の中央部に位置することや、遺跡東部を国道24号線が通過している事から第1次調査後も開発は続き、平成元年10月に旭食品株式会社の配送センター新築に伴う発掘調査（第2次調査）をおこなった。また、平成2年7月～8月には名阪開発株式会社の分譲住宅建設に伴う発掘調査（第3次調査）をおこなった。

第2次調査では、中世以降の耕作による削平のため遺構は希薄ではあったが弥生時代の遺構が周辺に散在的に存在すること、新たに奈良時代の遺

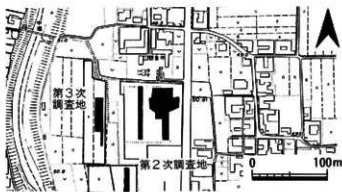


第1図 小阪里中遺跡の位置

第1表 調査地の概要

回数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積	調査担当
第2次	田原本町小阪300-1番地他	配送センター新築	宅地	旭食品株式会社	1989.10.2～10.10	230㎡	森田
第3次	田原本町小阪289-1番地他	分譲住宅建設	宅地	名阪開発株式会社	1990.7.23～8.10	300㎡	北野

構があることの2点を把握した。また、第3次調査では鎌倉時代の耕作遺構と第1次調査で検出した中世～近世の屋敷跡に関する鎌倉時代～室町時代の大溝群を確認した。以上それぞれ、小阪里中遺跡の性格をある程度明らかにすることのできた重要な調査となった。



第2図 調査地位置図

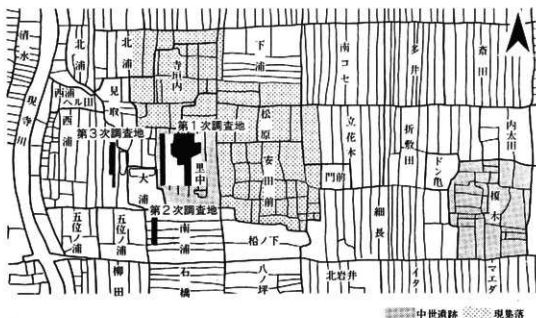
II. 位置と環境

小阪里中遺跡は奈良盆地のほぼ中央部にあたる磯城郡田原町小阪に位置する。遺跡は田原本町を縦断して北流する寺川の東岸沿いの沖積地に立地する。標高は48~49mであり、盆地内でも最も低地の部分であるといえる。

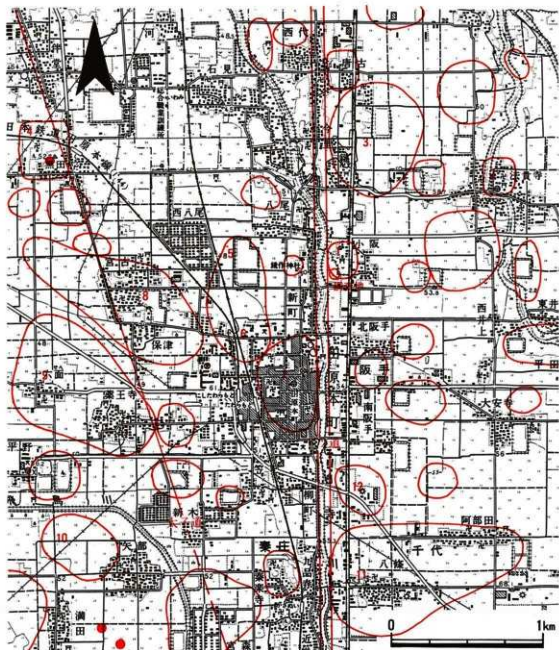
従来から指摘されている遺跡周辺の条里制土地区画線の乱れは旧河道の痕跡であると考えられており、寺川などの一支流にあたるものと予想されていた。第3図で示した小字名「西浦」を調査した第3次発掘調査では調査地の北半部分が旧河道内にあたり、小字名や条里制土地区画の乱れなどが地理的環境を考えるうえで有効性をもつことを裏付けた。

遺跡は田原本町を南北に縦貫する国道24号線に面しており、開発は国道沿線を中心に展開していることから遺跡周辺は宅地化が急激に進み、遺跡の北側にあたる観音寺境内を除けば水田部分がおわずかに残されているだけであり周辺の環境変化は著しいものがある。

本遺跡の北約500mには弥生時代を通じて栄えた全国でも最大級の環濠集落として知られる唐古・鍵遺跡があり、南西約600mには重要文化財に指定されている牛の埴輪などの形象埴輪を出土した羽子田遺跡(古墳)があり、北西約600mには羽子田遺跡と同様の性格と考えられている石見遺跡がある。また、寺川を挟んだ西岸には式内社の鏡作神社がある。遺跡の分布(第4図)をみると周辺地には遺物散布地が多く、それは弥生時代~古墳時代と中世の時期のものがほとんどである。中世の遺跡では、唐古・鍵遺跡内の環濠集落や東約800mには大規模な環濠集落を形成した法貴寺遺跡などが位置し、本遺跡との関連が注目されるところである。



第3図 小阪里中遺跡周辺の地籍・小字名と調査位置 (掲『大和国条里復原図』)



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1 小阪里中遺跡(古墳時代～近世) | 7 平野氏陣屋跡(中世～近代) |
| 2 法貴寺遺跡(中世～近世) | 8 保津・宮古遺跡(弥生時代～中世) |
| 3 唐古・鍵遺跡(弥生～古墳時代・中世) | 9 十六面・薬王寺遺跡(弥生時代～中世) |
| 4 黒田遺跡(古墳時代・中世～近世) | 10 矢部遺跡(弥生時代～中世) |
| 5 八尾遺跡(古墳時代～近世) | 11 千代遺跡(古墳時代・中世) |
| 6 羽子田遺跡(古墳時代) | 12 阪手遺跡(弥生～古墳時代・中世) |

第4図 小阪里中遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/25000)

III. 第2次調査の概要

1. 調査契機と経過

第2次調査地は国道24号線から西へ100m入ったところの住宅街の一角に位置している。この地より100m北側には古墳一基と中近世の邸宅跡を検出した第1次調査地がある。また、この第2次調査地から西へ200m、つまり、寺川の西岸には延喜式式内社である鏡作神社が鎮座している。この鏡作神社は御神宝である三角縁神獸鏡の内区が伝世していることでひろく知られている。この鏡作神社には4つの末社があり、そのうちの1つである鏡作麻気神社は第1次調査地のちょうど北側にあたる。このように調査地はこれら神社に囲まれるところに位置している。

昭和61年6月から8月におこなわれた第1次調査は旭食品株式会社の営業所新築に伴うものであった。その後、この営業所の南側に配送センターが計画され、平成元年3月6日埋蔵文化財発掘届が提出された。田原本町教育委員会では第1次調査の成果を受け、試掘調査の必要ありとの進達をおこなった。奈良県教育委員会はこのようなことから平成元年4月14日付で発掘調査についての協議をするように届出者に通知をおこなった。その結果、田原本町教育委員会が原因者負担で調査をおこなうこととなった。

2. 調査の全容

発掘調査は建物が建築される小阪301-2番地においてトレンチ調査をおこなった。調査区の設定は既に一部建築物基礎がたちあがっていることもあり、南北に長い不規則な調査区となった。調査区は南北約31.5m、南端の東西幅約9.2m、北端の東西幅は4.8mである。調査面積は約230㎡である。

調査はまず、機械力によって約0.5mの客土層や水田耕土層・床土層など約1.1mの土を除去した。この段階において遺物を包含する暗褐色粘土層が全面にあらわれ、その後、人力による遺構

検出作業をおこなった。遺構の詳細については次項であきらかにする。調査では弥生時代から中世までの諸遺構を同一遺構面で検出したことや遺構密度も希薄であったことから平成元年10月2日から同年10月10日までの延べ6日の調査となった。



写真1 調査前の状況

3. 遺構

(1). 層序

調査地における層序は第Ⅶ層まで確認している。いずれの土層も約0.2m前後の薄層で水平堆積しており、単純な構成をしている。

第Ⅰ層：暗灰青色粘質土層（水田耕土層）、第Ⅱ層：暗灰青色粘質土層（水田床土層）、第Ⅲ層：茶灰色粘質土層、第Ⅳ層：暗褐色粘質土層、第Ⅴ層：淡灰褐色微砂層、第Ⅵ層：明褐色粘土層、第Ⅶ層：灰黑色粘土層である。第Ⅳ層は弥生時代から中世までの土器を包含する土層である。したがって、この土層は中世以降の水田耕土層であった可能性が高い。第Ⅴ層の遺構面では弥生時代から中世までの諸遺構を同一面で検出している。この状況から中世頃にかんがりの削平を受けていたことがわかる。第Ⅴ層より下の土層は無遺物層であり、縄文時代以前の堆積土層である。

(2). 遺構

弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は調査区の中央から東において土坑2基と小溝2条を検出した。

S K-104

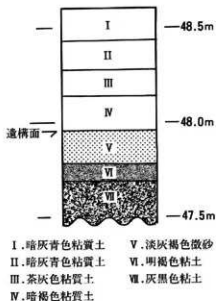
S K-104は不整形の小さな土坑である。長軸0.7m、短軸0.4m、深さ0.11mをはかる。土坑の底には直径0.1m程の小さなビットが3基つくられている。土坑の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は出土していないが、埋土が他の弥生時代の遺構と同じであることからこの時期のもつと判断した。

S K-105

S K-105はS K-104の北東0.3mにつくられた楕円形の小さな土坑である。長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.2mをはかる。この土坑も底のやや東よりに直径0.18mの小さなビットがつくられている。土坑の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は少なく、土器が4片出土したのみである。図示できないが弥生時代後期末の高杯杯部片が一点ある。

S D-101

S D-101は調査区の東端部やや南よりで検出した小溝である。小溝はほぼ東西方向に走向するものであるが、溝の西側は収束しており東側は調査区外へのびている。溝幅0.35m、深さ0.12m



第5図 第2次調査基本土層図 (S=1/20)

をはかる。溝の埋土は黒褐色土である。遺物は出土していない。溝の時期は決定しにくい。埋土の状況から弥生時代のものであろう。

SD-102

SD-102は調査区の中央で検出した小溝である。この小溝もほぼ東西方向に走向し、西側において収束する。東側は調査区外へのびている。溝幅0.6m～0.8m、深さ0.15mをはかる。溝の埋土は黒褐色土の単一層である。遺物は土器が数点出土しているのみである。小溝の時期は出土土器から弥生時代後期末である。

古墳時代の遺構

古墳時代と考えられる遺構は調査区の中央やや東よりで検出したもので、弥生時代の遺構の分布地域と重なる。検出した遺構は土坑が3基である。

SK-101

SK-101は不整形の小さな土坑である。長軸0.8m、短軸0.55m、深さ0.15mをはかる。土坑の埋土は暗褐色砂質土の単一層である。遺物は土器1片のみで詳細な時期決定はできないが、後述するSK-103の土坑と同じ状況から古墳時代後期のものと考えられる。

SK-102

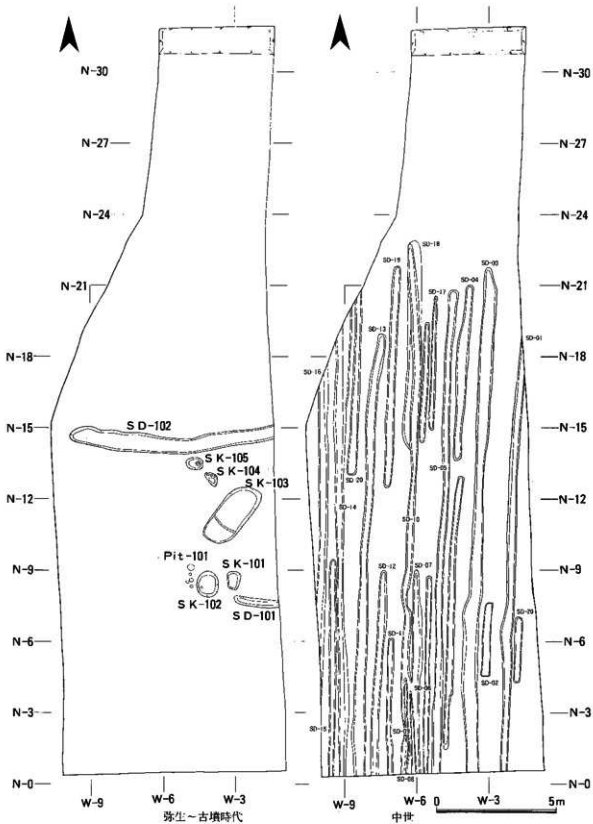
SK-102はSK-101の西0.4mにつくられた楕円形の小さな土坑である。長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.1mをはかる。土坑の埋土は暗褐色砂質土である。遺物は土師器が数片出土したのみである。この土坑も詳細な時期は不明であるが、SK-101と同様に古墳時代後期のものであろう。

SK-103

SK-103はSK-101の北1.2mにつくられた楕円形の土坑である。長軸2.9m、短軸1.3m、深さ0.16mをはかる。この土坑は北側が5cm程深く掘られている。土坑の埋土は暗褐色砂質土である。遺物は弥生土器・土師器・須恵器など細片が30片ほど出土している。土坑の時期は遺物から古墳時代後期である。

中世の遺構

中世の遺構としては調査区のN-0～N-23区の区域で素掘りの小溝を検出した。小溝はすべて南北方向に走向するものであるが、小溝のわずかな主軸のふりかたや小溝の収束のする位置から大きく3つほどに分けられる。1つはN-0～N-23まで長く走向するもの、2つ目はN-0～N-9まで、3つ目はN-13～N-23まで短く走向するものである。小溝は幅の狭いもので約0.2m、幅の広いもので0.6m、深さは0.1m未満の浅い溝である。小溝の埋土はいずれも暗褐色砂質土である。遺物は弥生土器や須恵器などの細片が出土しているが、これらは小溝掘削時の二次堆積物である。SD-03では瓦器碗、SD-20では土師器小皿が出土している。



第6図 第2次調査遺構平面図

4. 遺物

第2次調査で出土した遺物はごく僅かで、その構成は土器のみである。土器は弥生土器・須恵器・中世の土師器・瓦器などがある。土器は堆積上の第IV層から混在状況で出土したものが多いほか、中世小溝からも同様な状況で出土している。

(1). 土器 (第7図)

弥生土器 第7図-1は二重口縁壺の破片である。口縁端部は2条の沈線を施した後、円形浮文を貼り付けその上に竹管を押捺している。2は中形の鉢である。器壁は薄く、口縁部は上方へつまみあげている。

須恵器 3～15は須恵器である。3・4は杯蓋、5は杯身である。6～8は壺であるが、器形については小片のためわからない。9・10は高杯の脚部である。9は脚部の裾が大きく開く、古い形態である。10は柱状の脚部で2段の長方形透かしがあげられている。11・12は杯蓋のつまみ部分である。13は杯身で高台をもつ。14・15は壺底部で高台をもつ。

土師器・瓦器 16は土師器小皿である。口縁部はヨコナデを施し、その下には僅かな段がみられる。17～19は瓦器碗である。17は退化した高台がつけられている。18・19は口縁部が僅かに外反し、内面に沈線を施す。20は羽釜の鐙の破片である。

瓦 21は平瓦である。凸面は樋目の叩き痕、凹面は布目痕が残る。布目は端の方で粗くなっている。端縁は幅1.8cm前後の板の圧痕がついている。

2はSD-102、3はSK-103出土である。6はSD-19、8はSD-03、9はSD-20出土で、混在したものである。16はSD-20、19はSD-03出土である。他は包含層出土である。

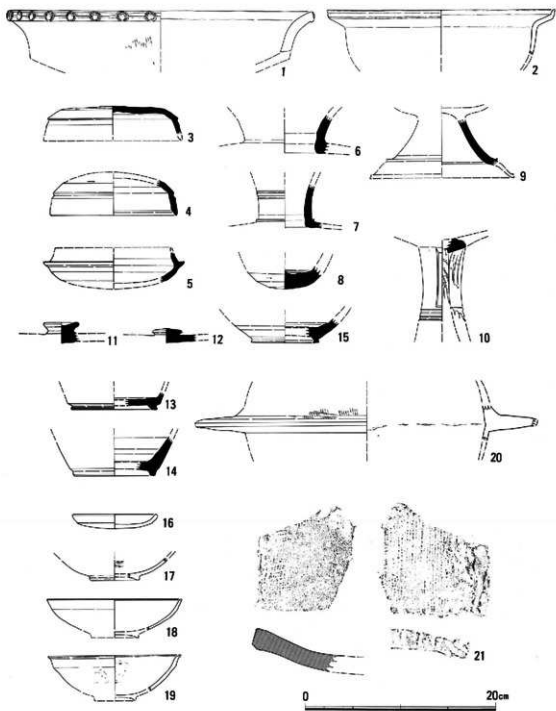
5. まとめ

第2次調査地は小阪里中遺跡の南端に位置している。第1次調査の成果から古墳の分布の状況や中近世の邸宅の広がりなどを把握することが一つの目的であった。発掘調査は小規模であったが次のような成果がみられた。

1. 弥生時代後期末と古墳時代後期の遺構が僅かであるがみられた。これらの分布密度は希薄であり、また、出土遺物も少ないことから居住区の周辺部であったと考えられる。また、その経営年代は短期のものであろう。

2. 奈良時代の遺構は未検出であったが、遺物包含層には比較的多くこの時期の上器が含まれている。これは調査地の周辺にこの時期の遺構の存在が推定され、西側の鏡作神社との関連も今後検討していく必要がある。

3. 中世以降は小溝が多数検出されたことから当地が農耕地に変化していたことがわかる。したがって、中近世の邸宅はこの地までおよんでいないことがわかった。しかしながら、調査地の北端では小溝がなく、邸宅の南側に一つの空地がつくられていたかもしれない。



第7图 第2次調査遺物実測図

IV. 第3次調査の概要

1. 調査契機と経過

平成元年5月に田原本町小阪289-1番地地で面積2824㎡の開発事前協議が当教育委員会によせられた。当該地は国道24号線の西側にあたり、昭和61年度に小阪里中遺跡第1次発掘調査をおこなった地点の西側に隣接する。第1次調査では弥生時代中～後期の遺構、古墳時代中期の古墳1基と中・近世の屋敷地跡が確認されており、本地も遺跡内に含まれると考えられ、発掘届の提出を要請した。その結果、平成元年7月14日付で名阪開発株式会社から発掘届が提出され、当町教育委員会が原因者負担で発掘調査をおこなうことになった。

2. 調査の全容

調査地は第1次調査地の西側に隣接することから、古墳及び中・近世の屋敷地跡延長部分の存在が予想された。したがって、申請地東寄りに東西幅7m、南北長40mの南北に長い調査区を設けた。なお、調査地自体が更に南北に長いため調査区東壁に沿って南に幅2m、長さ10mの拡張部分を設け遺構の有・無の確認につとめた。最終的に調査面積は300㎡となった。

調査の結果、中世の堰をとまなう大溝群などの諸遺構を検出し、周辺調査（第1・2次調査）との関係を明らかにすることができた。

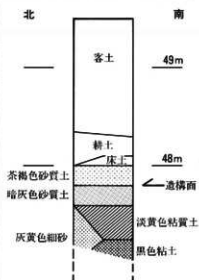
3. 遺構

(1) 層序

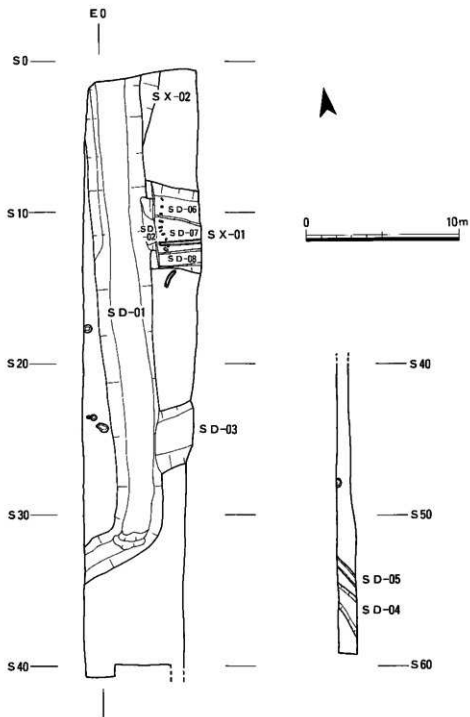
発掘調査地内の土層の堆積状況は第1次調査時と同様、昭和40年代に造成されたものと考えられる整地土層が地表面から深さ約1.2mの厚みをもって堆積し、さらに近世以来のものと考えられる堆積土層が0.4m～0.7mの厚さで堆積する。その下に中世の遺構面を確認した。遺構面の標高は48m弱であり南側の基盤層の堆積は上から暗灰色砂質土、淡黄色粘質土の順に安定して堆積するが、北側では暗灰色砂質土の下には灰黄色細砂層があり、これは河道堆積を示すものである。



写真2 遺構検出状況 (北から)



第8図 土層柱状模式図



第9圖 第3次調査遺構平面図

(2). 遺構

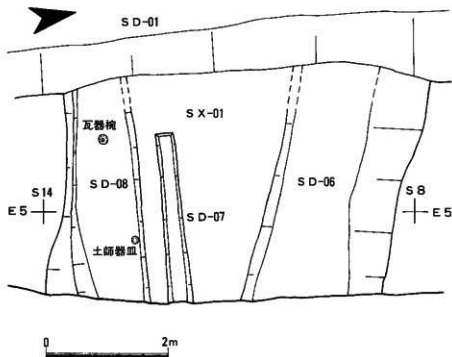
SX-01

SX-01は溝(SD-06~08)をとともなう耕作遺構である。(第10図)南北幅約6m、深さ約0.6mをはかる。遺構内埋土第3層は茶色砂質土が約0.3m、第4層は耕作土と考えられる灰色粘土が約0.3m堆積する。(第11図)その下には溝が東西方向に3条掘削されている。北からSD-06は幅1.6m深さ0.2m、SD-07は幅0.5m深さ0.2m、SD-08は幅1.0m深さ0.2mをはかる。SD-06の堆積土はSX-01の第4層が流れ込んでいる。SD-07、-08の堆積土は第5層・暗灰色粘土である。SD-07は調査区東壁から西に約2.8mのところまで止まっている。

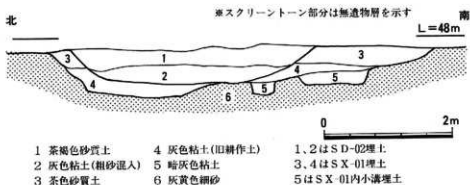
SX-01は調査区東側から西に続きSD-01に切られているが、断面観察からSD-01を越えて西側には続かない。北側にSX-01と同様の堆積状況をもつ溝状遺構(SX-02)が一部確認されており、これに続くものと考えられる。出土遺物はSD-08を中心に瓦器碗などがある。

SD-01

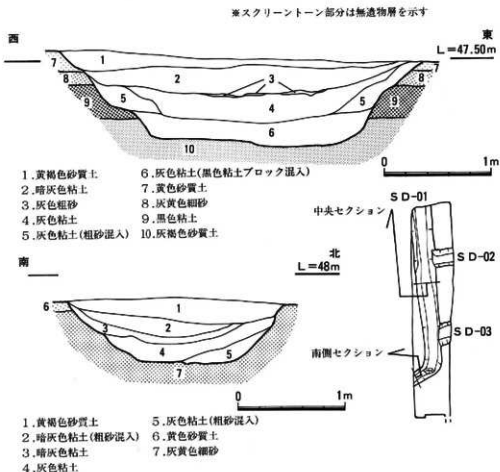
SD-01は幅3~4m、深さ0.9mをはかる南北方向の大溝である。(第9図)南北には35mの範囲で確認しているが、掘削当初は東側からSD-02、SD-03がそれぞれとり付いていたものと考えられる。最終的にはSD-02、SD-03が埋没後再掘削され、新たに南側で走行方向を西南に屈折・延長させたものと考えられる。遺構内の土層堆積で再堀前後の堆積と考えられるものは中央



第10図 SX-01遺構平面図



第11図 SX-01、SD-02東壁土層断面図

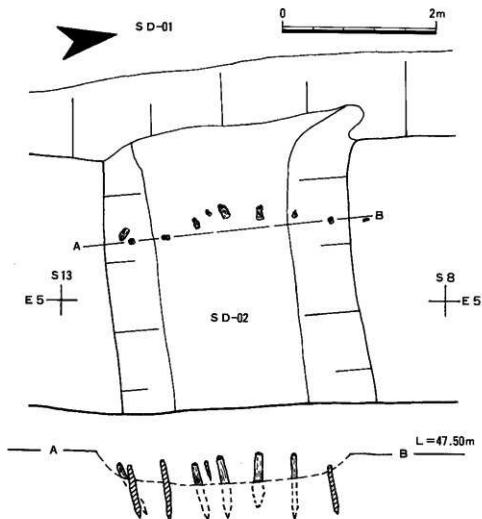


第12図 SD-01土層断面図

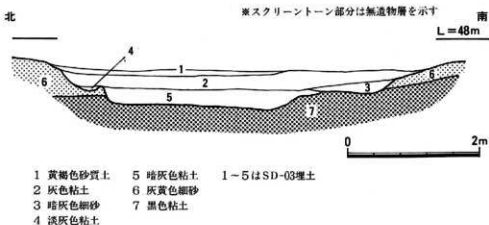
セクション（第12図上）では第1層・黄褐色砂質土、第2層・暗灰色粘土、第3層・灰色粗砂、第4層・灰色粘土であり、これらの堆積に対応するものは両側セクション（第12図下）では、第1層・黄褐色砂質土、第2層・暗灰色粘土、第3層・暗灰色粘土、第4層・灰色粘土である。中央セクションにみられる第5層・灰色粘土（粗砂混入）、第6層・灰色粘土（黒色粘土混入）はSD-02やSD-03の灰色粘土層とつながるものである。遺物は瓦器碗・土師器皿などが各層から出土している。

SD-02

SD-02は幅3.7m、深さ0.6mをはかり、SD-01に西側からとり付く東西方向の大溝である。



第13図 SD-02遺構平面図及び掘断面図とおし図



第14図 S D-03東壁土層断面図

遺構内の土層堆積（第11図）は単純であり、第1層・茶褐色砂質土、第2層・灰色粘土（粗砂混入）の2層に大別できる。第1層はSD-01の第1層に切られていたが、第2層はSD-01中央セクションの第5層と共通するものであった。付属施設としてSD-01との境に杭を打ち込んだ塚をもつ。（第13図）塚の杭は10本検出しており、長さ20cm～30cm程度の小杭が2本と長さ60cm～80cm程度の大杭が8本で構成される。杭の先端部分は3～4分割の削り込みで尖らせたものである。主要な杭は約40cm間隔で打ち込まれており、南端部分のみ2本同じ場所に打ち込んでいる。杭は溝の機能時には地中に40cm～50cmの深さで打ち込まれていたものと考えられる。遺物は瓦器類・中国製青磁碗などが少量出土した。

S D-03

SD-03は幅3.6m、深さ0.6mをはかる。（第9図）SD-01に西側からとり付く東西方向の大溝であり、SD-02とは並行するものである。遺構内の土層堆積（第14図）は第1層・黄褐色砂質土、第2層・灰色粘土、第3層・暗灰色細砂、第4層・淡灰色粘土、第5層・暗灰色粘土となり第2層と第5層がSD-01の埋土と共通するものである。

S D-04、05

SD-04、05は南側拡張区の南端で並んで検出したものである。（第9図）双方共に南東から北西に走向方向をもち、SD-04は幅1.5m、深さ0.15m、SD-05は幅0.5m深さ0.15mをそれぞれはかる。時期を決定できる遺物は出土しなかったが遺構内埋土などからSD-01～03よりは古い時期のものとおもわれる。

以上、主要遺構について記述したが、これら以外の検出遺構に時期不明のピットなどがある。

4. 遺物

遺物はSX-01、SD-01、SD-02を中心に出土している。遺物の時期は鎌倉時代から室町時代前期にかけての瓦器碗・土師器皿などの土器が主体を占め、これらの土器の年代が遺構の存続時期を示すものと考えられる。少量ながら弥生土器・土師器・須恵器・瓦などが細片でSD-01から出土している。以下、遺構単位に説明する。

(1). 土器 (第15区)

SX-01出土土器

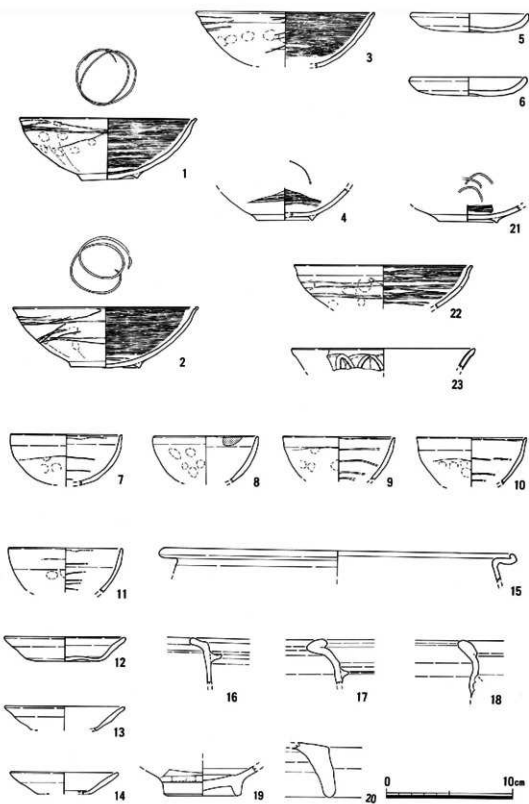
SX-01出土土器は瓦器碗(1~4)、土師器皿(5、6)などがある。瓦器碗は基本的に同じ形態のものであり、内底部に2回転渦巻状の暗文を施し、内側面はやや密な平行線暗文をおこなう。外側面は4~5単位の平行線暗文を体部中位まで雑に施している。高台は断面三角形のものが付く。1はSX-01下層の小溝SD-08から、2~4はSX-01耕作土中から出土した。土師器皿(5、6)は直径9cm程度の小皿であり、底部中央がやや内側にもりあがるものである。側面はヨコナテ調整で仕上げしており、外側面と底部の境は明瞭な稜をなす。5はSX-01下層の溝SD-08から、6はSX-01耕作土中から出土した。

SD-01出土土器

SD-01出土土器は瓦器碗、土師器皿、土釜、瓦質蓋、東播系須恵器こね鉢、中国製白磁碗などがある。瓦器碗(7~11)はいわゆる半球形のものである。暗文は内面に3~5回転施される程度であり、高台は付かない。出土層位は中央セクション対応で7は第1層、8は第2層、9は第3層、10・11は第4層から出土している。土師器皿(12~14)は直径9cm強のものであり、内側面は横方向のハケ調整がみられる。口縁端部はヨコナテ調整で外上方にひらく。12は完形で第2層から、13、14は第3層から出土している。土釜(15~18)は4形態出土している。15は口縁部を横にひらき、ヨコナテ調整で端部を「く」字状につまみあげるものである。16は口縁部を内傾させ、外面口縁部近くに鋳をもつものである。17は口縁端部を外側に折り曲げ玉縁状に仕上げるものであり、外面体部上半部に貼付け突帯をもつ。18は前例のものよりやや体部が直立するものである。15・16は第1層、17・18は第2層から出土している。瓦質蓋(20)は端部をヨコナテ調整で仕上げしており、外側面はその上をミガキ調整している。第1層からの出土である。中国製白磁碗(19)は太宰府編年の白磁碗V類に相当するものであり、内底面の軸を輪状に削り取っている。第2層からの出土である。その他、外面に平行叩き成形痕を残す瓦質蓋(図版14-a)、瓦質鉢、中国製褐釉四耳甗(図版14-b)などが第2層、東播系須恵器こね鉢などが第3層から出土している。

SD-02出土土器

SD-02出土土器は瓦器碗(21、22)中国製青磁碗(23)、瀬戸灰釉壺などがある。瓦器碗(21)は内底部に2~3回の乱れた渦巻状の暗文を施すもので、断面三角形の高台をもつものである。青磁碗(23)はいわゆる龍泉窯系のもので外面体部に瑣蓮弁文を片切り形で施文するものである。釉は透明度が高く、青緑色に発色する。



第15圖 第3次調査遺物実測図

5. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代から室町時代にかけての遺構及び遺物を検出することができた。遺構の主なもの、鎌倉時代前期の耕作遺構と鎌倉時代後期～室町時代前期の大溝群である。

耕作遺構（SX-01）については広陵町・箸尾遺跡に類例があり、耕作土及び小溝（SD-08）から出土した遺物の年代から13世紀前半頃に農耕地として機能していた時期の一端を求めることができる。また、SX-01内のSD-08から出土した完形の瓦器椀1点・土師器皿1点は農耕地に土器を埋める行為が存在したことを示唆し、何らかの儀礼による結果であることを推定させる。

大溝群（SD-01～03）であるが、条里制の土地区画方向（東－西、南－北）に走向方向をもつことから条里制の土地区画がなされた後の屋敷地の区画溝的な性格が考えられる。また、大溝SD-01に対してのSD-02の堰は当時の灌漑の様相を示す具体的な資料であるといえ、大溝群は用水路としての機能を兼ね備えたものであったといえる。

昭和61年の東側隣接地での第1次調査では15～19世紀にかけての時期の在地武士小阪氏に関係すると思われる大溝群が検出されたが、今回の調査ではそれ以前と考えられる鎌倉時代後期～室町時代前期の大溝群を検出した。第1次調査でも当該期の遺構は検出されているが、調査期間等の制約により十分な調査は不可能であった。しかし今回の調査で検出した大溝群は中世における奈良盆地の環豪集落についての具体的な資料となり、第1次調査の検出遺構とあわせて理解・検討してゆく必要がある。



写真3 小阪里中遺跡第1次調査検出中世大溝・堰

小 阪 里 中 遺 跡

図 版

第 2 次 調 査 …… 図 版 2 ～ 4

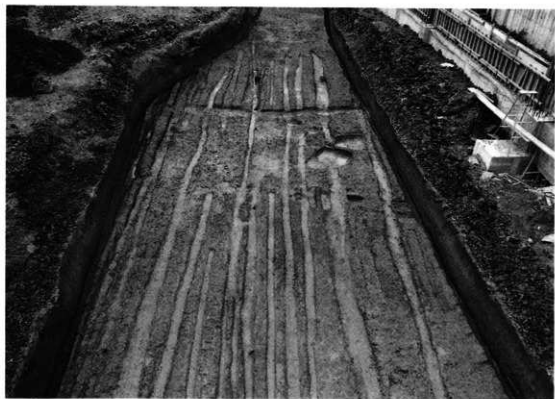
第 3 次 調 査 …… 図 版 1、5 ～ 14



小阪里中遺跡全景（上が北）



遺構検出状況(南から)



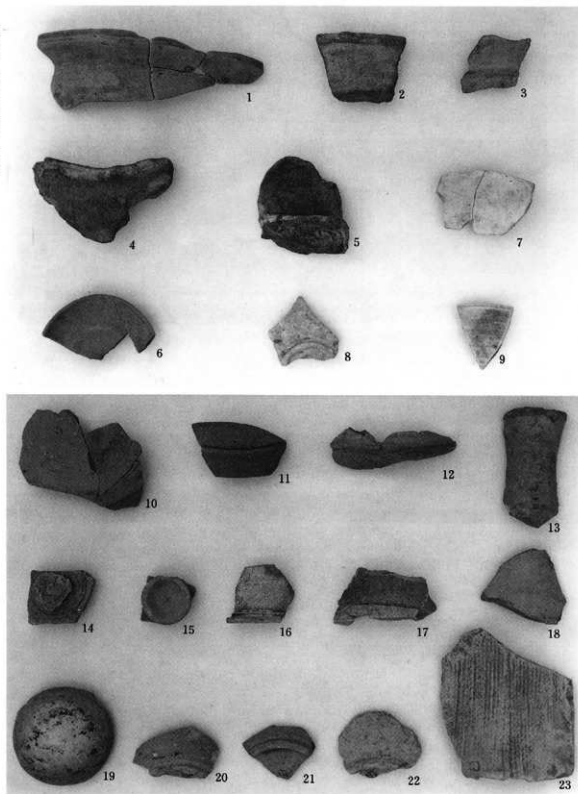
遺構完掘状況(南から)



S D-101・S K-101・S K-102完掘状況(東から)



S D-102完掘状況(東から)



1~3—弥生土器、4~6—土師器、7~9—瓦器、10~22—須惠器、23—瓦

1—S D-102, 3—S K-105, 5—S D-15, 6—S D-20, 9·19—S D-03, 10—S K-103, 17—S D-17
18—S D-20, 2·4·7·8·11·12~16·20~23—包含層



調査前の状況（南から）



調査地全景（右が北）



SD-01 (南から)



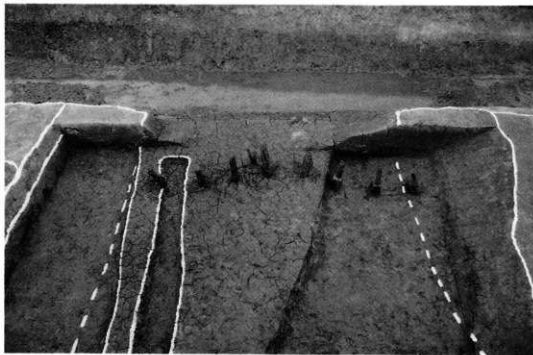
SD-01南側屈折部分 (東から)



SD-01中央セクション土層堆積状況 (南から)



SD-01南側セクション土層堆積状況 (東から)



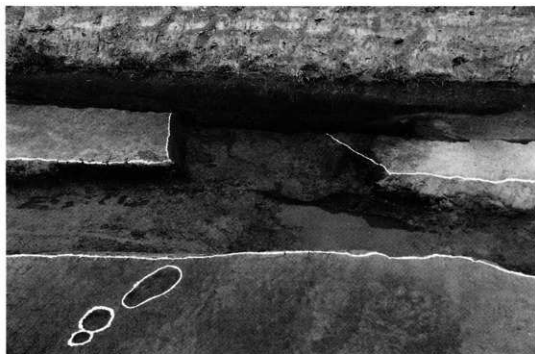
S X-01、SD-02 (東から)



SD-02堰・杭の打込み状況 (東から)



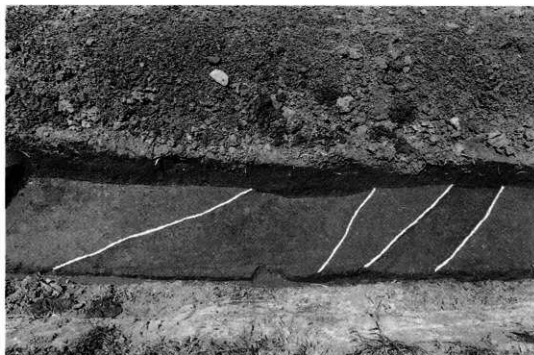
S X-01、S D-02土層堆積状況 (西から)



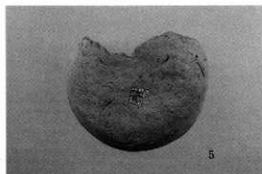
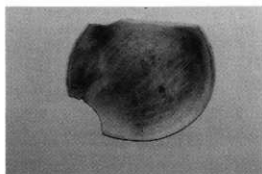
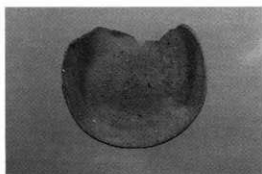
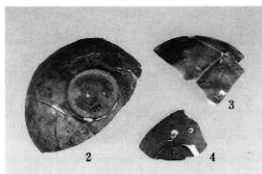
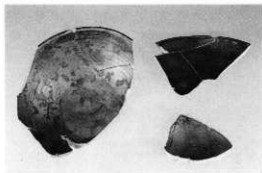
S D-03 (西から)



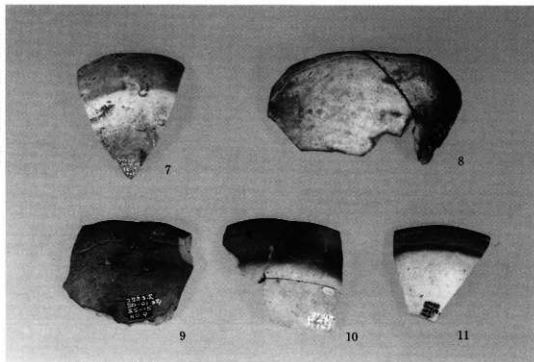
SD-03土層堆積状況 (西から)



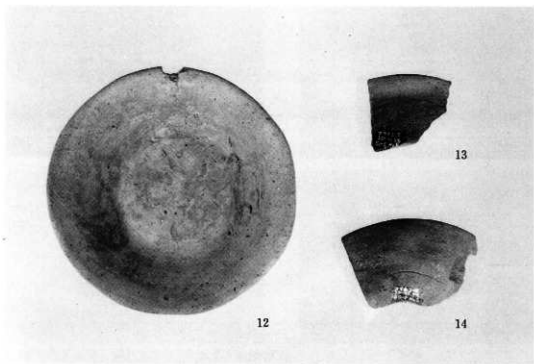
SD-04、SD-05 (東から)



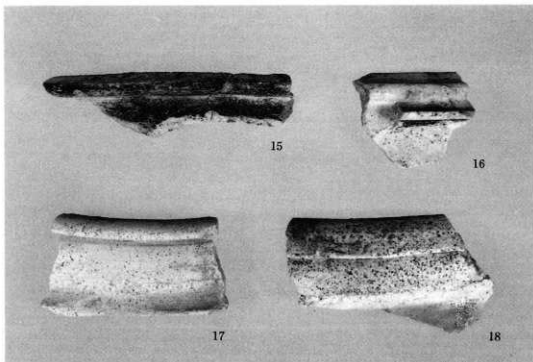
SX-01出土遺物 1~4瓦器碗 5・6土師器皿



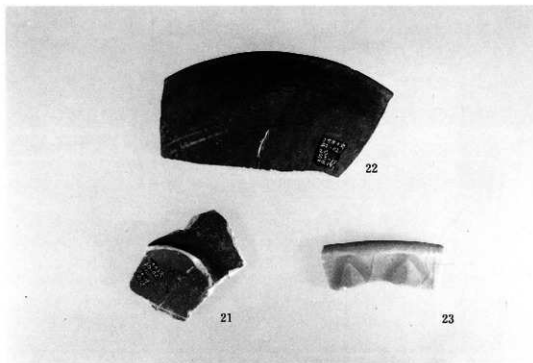
SD-01出土遺物 瓦器碗



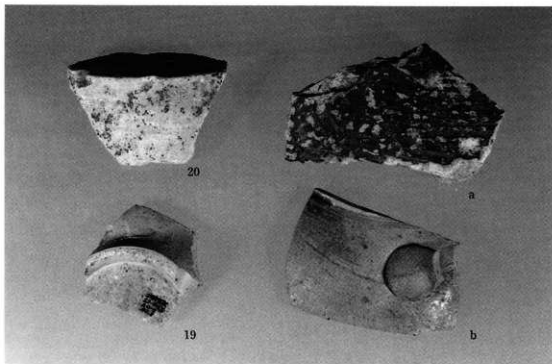
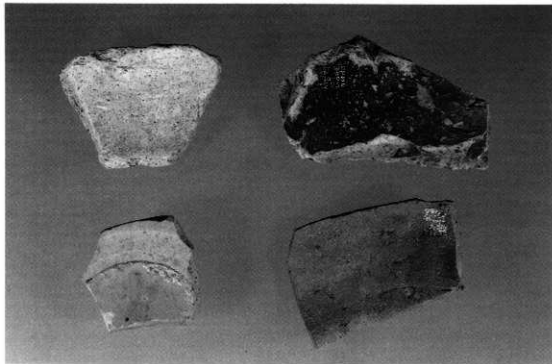
SD-01出土遺物 土師器皿



SD-01出土遺物 土釜



SD-02出土遺物 21・22瓦器碗 23青磁碗



S D-01出土遺物 19白磁碗 20瓦質蓋 a瓦質甕 b褐釉四耳壺

平成2年度

千代遺跡

第1次発掘調査概報

例 言

1. 本書は、大谷住宅株式会社代表取締役 大谷 武氏の依頼により奈良県磯城郡田原本町千代336番地において実施した分譲住宅建築に伴う事前発掘調査の概要報告である。
2. 現地調査及び概報作成は以下の関係者でおこなった。

[現地調査]

田原本教育委員会	教育長	岩井光男	
	教育参事	岩井重幸	
	文化財保存課	書記	中村佳三
	"	技師	北野隆亮 (現地担当)

[概報作成]

田原本教育委員会	教育長	岩井光男	
	教育次長	岩井重幸	
	文化財保存課	課長	石橋一晃
	"	補佐	小西敏夫
	"	書記	中村佳三
	"	技師	北野隆亮

3. 調査にあたっては、大谷住宅株式会社代表取締役 大谷 武氏より多大な御理解と御協力を賜った。
4. 調査補助員として出田 直 (花園大学学生) が参加した。また、出土遺物の整理にあたっては坂梨咲子、高橋知了、笠井賢治 (以上奈良大学学生)、貫代寛典 (関西大学学生) 及び末広真理子、中谷利枝、福加代子の各氏の手をわずらわせた。

発掘作業にあたっては中谷義弘、田辺 寛、元田喜代兵衛、中居義喬の各氏が参加した。

5. 概報作成にあたり、下記の方々に現地及び整理作業時に有益な御教示・御指導を賜った。記して感謝の意を表します。

関川尚功、寺澤 燕、近江俊秀 (以上奈良県立橿原考古学研究所)、松本洋明 (天理市教育委員会)、竹田政敏、濱口和弘 (以上橿原市教育委員会)、山川 均 (大和郡山市教育委員会)、浦西 勉 (奈良県立民俗博物館)、江谷 寛 (古代学研究所)、若田重雄、鈴木和夫、篠原俊次 (以上日本計量史学会)、鈴木康之、下津岡康夫 (以上広島県宇野千軒町遺跡調査研究所)、鈴木秀典、森 毅、宮本佐知子 (以上大阪市文化財協会)、橋本久和 (高槻市教育委員会)、鶴柄俊夫 (大阪文化財センター)、森村健一、鳴谷和彦、續 伸一郎 (以上堺市立翠蔵文化財センター)、岩田 陸 (福井県立朝倉氏遺跡資料館)、上田秀夫 (和歌山県文化財センター)

6. 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
7. 本概報の執筆・編集は北野がおこなった。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査契機と経過	1
2. 位置と環境	2
II. 遺構	
1. 層序	4
2. 古墳時代の遺構	6
SD-101	
3. 平安・鎌倉時代の遺構	7
SB-01、SB-02、SB-03、SE-01	
SE-02、SE-03、SE-04	
III. 遺物	
1. 古墳時代の遺物	11
SD-101出土土器	
2. 平安・鎌倉時代の遺物	11
SE-03出土土器	
その他の遺構出土土器	
木製品	
石製品、自然遺物	
IV. まとめ	
1. 千代遺跡の遺構の変遷	20
2. 千代遺跡の性格	21

I. はじめに

1. 調査契機と経過

平成元年9月に千代336番地の開発事前協議が当教育委員会によせられた。当該地は南北に田原木町を縦貫する国道24号線とその西側約150mの距離に並行して流路をもつ寺川に挟まれたところに位置し、奈良県遺跡地図には11-C-62と記載され、古墳時代～室町時代の遺物散布地として周知された千代遺跡の西側隣接地にあたる。また、下ッ道の推定線上にも相当することから、発掘届の提出を要請した。

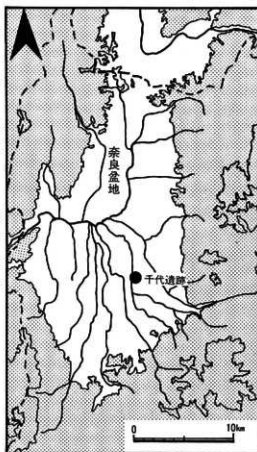
その結果、平成元年10月19日付けで大谷住宅株式会社から発掘届が提出され、当町教育委員会が原因者負担で発掘調査をおこなうことになった。

第1表 調査地の概要

所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
田原本町千代336番地他	分譲住宅建築	水田	大谷住宅株式会社	1990.5.14-6.2	約240㎡

調査は届出書に基づき、平成2年3月12日に試掘調査をおこなった。試掘調査は届出地の東側部分で東西2m、南北2mの試掘坑を設定しておこなった。調査の結果平安～鎌倉時代の遺物包含層を確認し、遺構の存在が予想された。したがって、試掘調査成果に基づき原因者と協議をおこなった結果、本調査を実施することになった。

本調査は下ッ道推定線上にあたることから、南北幅約5m、東西延長50mの南北に長い調査区を設け、調査面積は240㎡となった。調査の結果、古墳時代後期の溝、平安～鎌倉時代の掘立柱建物・井戸等の諸遺構を検出し、多大な成果をあげることができた。

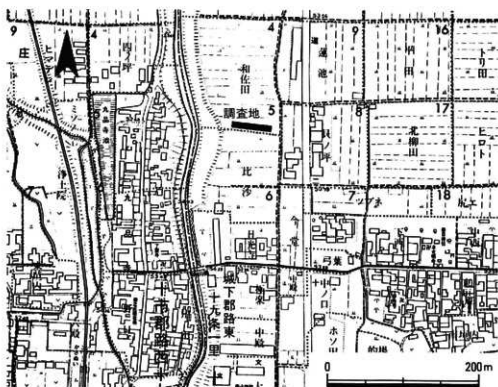


第1図 千代遺跡の位置

2. 位置と環境

千代遺跡は奈良盆地のほぼ中央部にあたる磯城郡田原本町千代に位置する。遺跡は田原本町を縦断して北流する寺川の東岸沿いの沖積地上に立地し、標高51m前後をはかる。遺跡の周辺は条里制土地区画の痕跡をよく留めた水田地帯であるが、寺川沿いの部分は自然堤防が形成され河道の影響を受け乱れた土地区画を示す。また、東に国道24号線が近接することから宅地造成などの開発行為が頻発し、遺跡周辺の環境変化は著しいものがある。

調査地は城下郡路東十八条一里に条里復原された場所内にあたり、寛弘七年（1010）の東大寺牒に記載のみえる「千代庄」、あるいは延久二年（1070）の興福寺雑役免付帳にみえる「八条南庄」などの荘園が周辺に存在したものと考えられる。千代遺跡周辺の遺跡分布は弥生時代～古墳時代のもでは西南約1.5kmに多遺跡、西北約1.5kmに十六面・薬王寺遺跡、西約1.5kmに矢部遺跡が位置する。中世の主要遺跡では東南約1kmに有力在地武士十市氏の居館と推定される十市城、西北約1.5kmには昭和56年度に奈良県立橿原考古学研究所により発掘調査がなされ中世環濠集落の遺構が確認された十六面・薬王寺遺跡がある。北約2kmには本書にその調査成果の一部を掲載した小阪里中遺跡があり、当遺跡と時期が重なることから関連が注目されることである。西南約1.5kmには昭和60年度に橿原考古学研究所が延べ16000㎡にわたり中世の水田遺構を発掘調査した多遺跡が立地する。調査地の小字名（第2図）は「和佐田」であるが、南には「日光寺、極楽、今堂、中殿」など寺院に関する小字名が残存しており、寺院関係の遺構の存在が予想された。

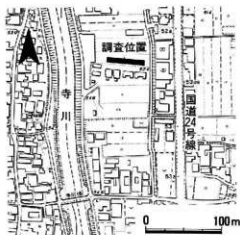


第2図 調査地周辺の小字名（換「大和国条里復原図」）

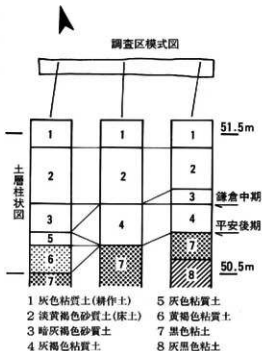
II. 遺構

1. 層序

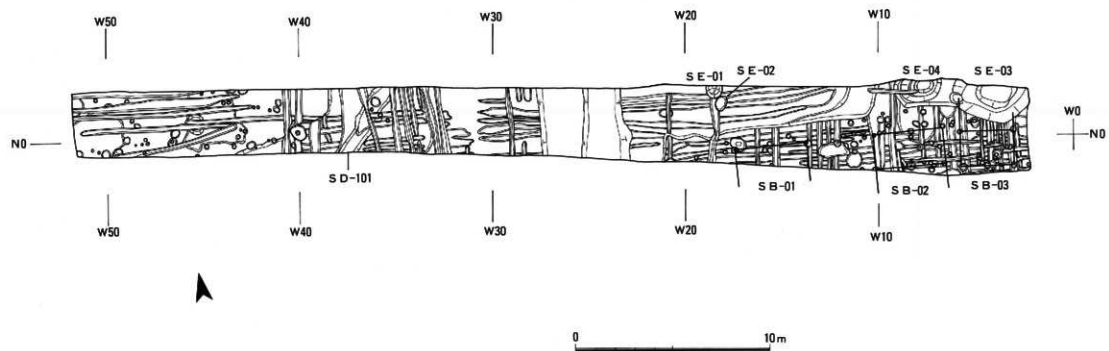
調査地は調査前の地目が水田であり、地表面から第1層・灰色粘質土（現水田耕作土）・第2層・淡黄褐色砂質土（床土）が約70cmの厚みで堆積する。東端部と西端部には第3層・暗灰褐色砂質土が堆積し、西端部分以外では第4層・灰褐色粘質土が堆積しており、この第4層の上面が鎌倉時代中期の遺構面となる。この層は土師器皿・瓦器柄などの遺物を多く含み、その堆積は特に調査地中央部で厚さ30cmと深くなる。第4層を除くと中央部から東側にかけては第7層・黒色粘土上面、また西側では第5層・灰色粘質土上面が平安時代後期の遺構面であることから、第4層はこの部分を埋め立てた整地土であると考えられる。したがって、当調査地は中央部の微低地と東・西の微高地状地形の部分に分けられる。西側微高地のみ第4層の下に第5層が堆積し、その下の第6層・黄褐色粘質土上面で平安時代後期頃のピットや小溝を検出した。小溝の埋土が第5層と類似することから、第5層は平安時代後期頃の耕作土にあたるものと考えられる。第6層は西側微高地にのみみられ、その下の第7層は調査地全面にみられる。しかし、第7層上面の標高が東から50.8m、50.6m、50.4mと西にゆくほど低くなる。第6層以下が無遺物層である。本調査では、西側微高地は第6層上面、中央部と東側微高地上では第7層上面を遺構検出面として古墳時代～鎌倉時代を同一面ととらえた。



第4図 千代遺跡調査位置図



第5図 千代遺跡土層柱状模式図

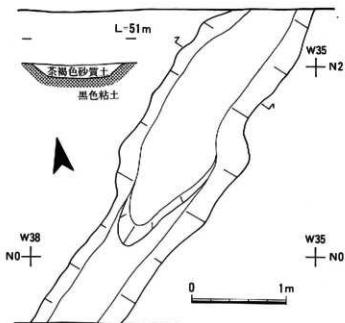


第 6 图 千代遺跡遺構平面図 (S = 1/200)

2. 古墳時代の遺構

S D-101

S D-101 (第7図) は第7層・黒色粘土を基盤層として掘削されている。遺構は北東から南西に走向方向をもつ溝であり、幅0.8~1.2m、深さ15cmの規模をはかる。遺構の堆積状況は茶褐色砂質土が1層のみ埋土となるだけである。出土遺物としては土師器・須恵器などがあり、それらの年代観からS D-101は古墳時代後期の遺構であると考えられる。



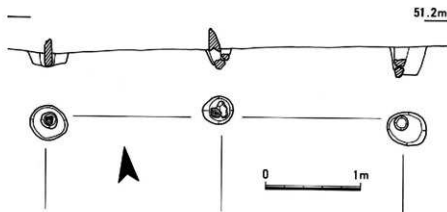
第7図 S D-101遺構平面図及び土層断面図 (S = 1/40)



写真1 S D-101遺物出土状況 (南西から)

3. 平安・鎌倉時代の遺構

平安時代の遺構の全体像は明確ではないが、平安時代後期を中心とした時期のピット群を西側微高地上で検出した。また、東側微高地では平安時代後期の井戸を1基確認した。なお、この井戸が埋没後調査地全面が耕作地となり東西あるいは南北方向に小溝（幅25～40cm、深さ10～30cm）が多数掘削される。耕作地としての時期は小溝の出土遺物から平安時代末期～鎌倉時代前期であると考えられる。鎌倉時代の遺構は掘立柱建物3棟、井戸3基などがある。以下、主要な遺構について個別に説明する。



第8図 SB-01遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

SB-01

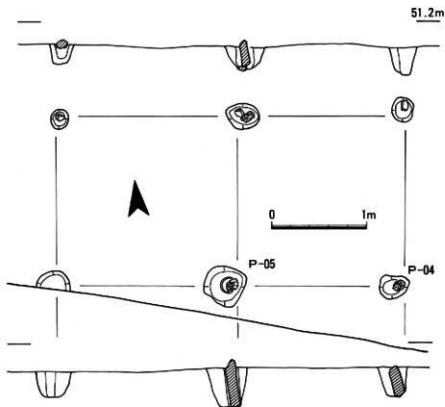
SB-01 (第8図) は東西2間、南北1間以上の掘立柱建物である。柱間の距離は1.8mをはかる。柱穴には柱が遺存したものや、根石を残したものがある。

SB-02

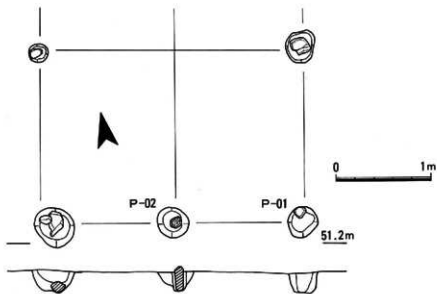
SB-02 (第9図) は東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である。柱間の距離は約1.8mをはかりSB-01と共通する。またSB-02はSB-01と東西に軸線をあわせて配置されており、同時期に存在したものであると考えられる。遺構の状況はSB-01と同様柱穴内に柱を遺存させたものや、根石を残したものもある。とくに、P-04とP-05に遺存した柱(図版18b、c)は保存状況が良好であった。

SB-03

SB-03 (第10図) は東西2間、南北2間以上の掘立柱建物である。東西の柱間の距離は1.4m、南北は1.8mをはかる。SB-01・02と同じく柱穴内には柱を遺存させたものや根石を残したものもある。そのうちP-01は建物廃絶時に柱を抜き取ったものと思われ、柱穴内に完形の瓦器碗を入れていた。またP-02は柱の掘方内に瓦器碗・皿を入れており、これについては建物を建てる際に埋納、あるいは粉れ込んだものと思われる。SB-01・02とは若干建物の主軸方向が違い、出土遺物からSB-03が古い時期といえる。



第9図 SB-02遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)



第10図 SB-03遺構平面図及び断面図 (S = 1/40)

SE-01

SE-01 (第11図) は直径85cm、深さ40cmで平面形円形、断面形は楕鉢状を呈する素掘りの井戸である。遺構内堆積は、上から灰褐色粘質土、青灰色粘土、黄色粘質土の順に堆積している。遺物はほとんど出土しなかった。

SE-02

SE-02 (第12図) は直径約50cm、深さ約55cmの平面形楕円形の円柱状を呈する素掘りの井戸である。遺構内堆積は上層に灰褐色粘質土が厚さ約10cm堆積し、それより下層は青灰色粘土が底まで堆積する。土師器皿・瓦器碗・漆器碗などが出土した。

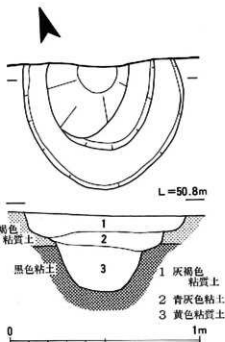
SE-03

SE-03 (第13図) は直径3.8m、深さ1.3mの平面形不整形円形、断面形は楕鉢状を呈する井戸である。

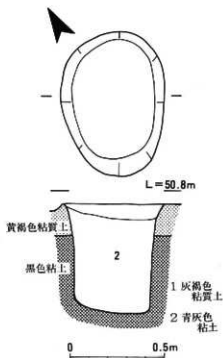
遺構底部から曲物などが出土していることから、当初は曲物等の井戸枠をもっていた可能性がある。遺物は土師器皿・瓦器碗等多量に出土した。第1層から第5層までに遺構内堆積土層を分層したが、遺物のとりあげとの対応は土層図の第1・2層に対して遺物のとりあげが第1層、土層図の第3層に対して遺物のとりあげは第2層、土層図の第4・5層に対して遺物のとりあげは第3層である。土器類以外に建築材などの木製品、種子などの自然遺物も出土している。

SE-04

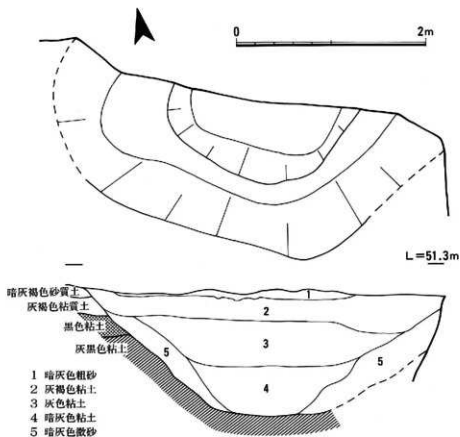
SE-04 (第14図) は直径約2m、深さ0.7mの平面形円形、断面形楕鉢状の素掘りの井戸である。遺物は土師器皿や瓦器碗などが出土している。遺構内堆積は上から第1層・黄褐色粘土、第2層・灰褐色粘質土、第3層・灰褐色粘質土の順に堆積する。土層図の層位と出土遺物のとりあげ層位は対応するものである。



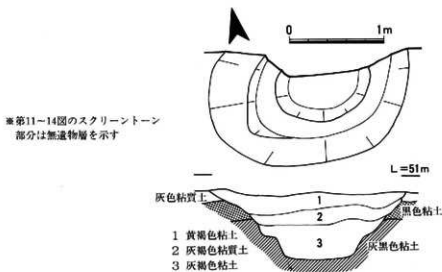
第11図 SE-01遺構平面図及び土層断面図 (S = 1/20)



第12図 SE-02遺構平面図及び土層断面図 (S = 1/20)



第13図 SE-03遺構平面図及び土層断面図 (S = 1/40)



第14図 SE-04遺構平面図及び土層断面図
 (S = 1/40)

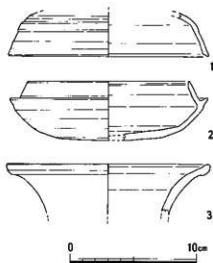
III. 遺物

1. 古墳時代の遺物

SD-101出土土器 (第15図)

SD-101からは須恵器杯蓋(1)・杯身(2)・高杯・壺(3)、土師器甕などが出土した。

須恵器蓋(1)は直径15.8cm、残存高3.5cmをはかり、やや外側に端部を開くものである。須恵器杯(2)は口径12.8cm、最大径15.6cm、器高4.7cmをはかり、かえり部がやや短く内傾するものである。1、2ともに出辺編年のTK-10梨型の範跡に収まるものである。須恵器壺(3)は口縁部のみ破片であり、口径16.0cm、残存高4.0cmをはかる。その他TK-43型式にはいると思われる須恵器杯もあり、これらの遺物群の年代を6世紀後半にもとめることができる。



第15図 遺物実測図1

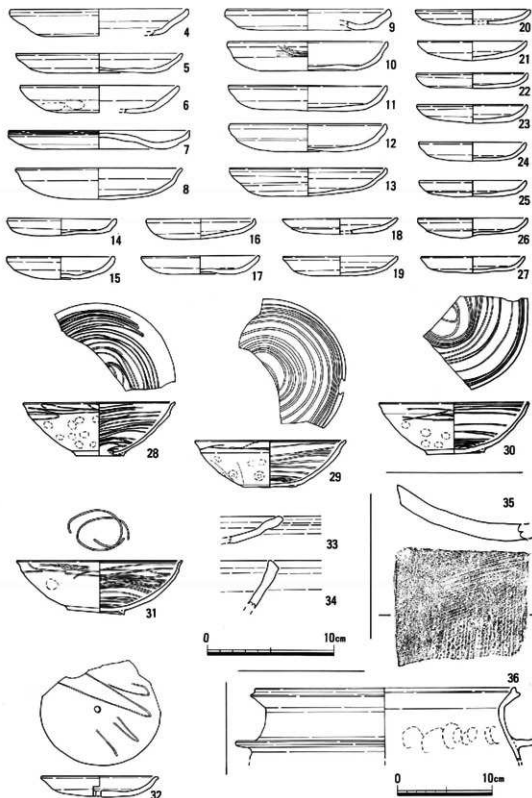
2. 平安・鎌倉時代の遺物

平安・鎌倉時代の遺物は井戸などを中心に多量に出土した。そのうち最も量質共にまとまった出土をみたSE-03を中心に以下説明する。

SE-03出土土器 (第16・17図)

SE-03から出土した土器を上層から第1層、第2層、第3層の順に出土層位毎に説明する。

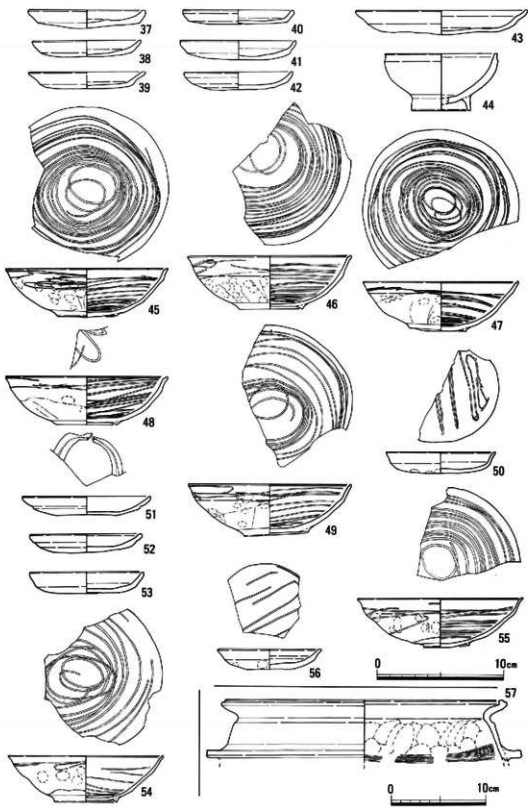
第1層出土土器(第16図)は4~36である。土師器大皿(4~13)は口径12.5~14.3cm、器高1.5~2.5cmまでそれぞれタイプを異とするものである。すべて外底部は指おさえて、内・外側面はヨコナデ調整で仕上げるものである。赤褐色に発色するものは4~6であり、7~13は褐色系のものである。口縁部の形態は8が強いヨコナデ調整により外反する以外は、すべて口縁端部を上につまみあげるものである。底部の形態では平底(8、10、11、13)のものと同上げ底(5、7、9、12)のものがある。7は上げ底になるものなかでも特に底部中央を盛り上げる特徴的なものである。土師器小皿(14~27)はすべて口径8.2~9.1cm、器高1.2~1.6cmの範囲に収まるものであり、基本的には同じタイプのものであるといえる。17のみやや大振りであり、口径9.4cmと最も大きい。また出土位置からこの個体は別遺構からの混入品である可能性がある。すべて底部は指おさえて内・外側面はヨコナデ調整で仕上げるものである。赤褐色に発色するものは14~16であり、褐色系のは17~27である。口縁部の形態は大皿と共通し、口縁端部を上につまみ上げるものである。底部はほとんど平底につくられており、上げ底気味のは15と17だけである。瓦器椀(28~31)は川越氏編年案のIII-C・D(近江氏編年案のI・7・II-1)に対応するもので



第16圖 遺物実測図2

ある。すべて、口縁部が外反し、口縁部内側に沈線を施すものである。高台は断面三角形のものが貼付けられ、色調は黒灰色を呈する。暗文は内底部から側面へ右回転で施すものが28と30、内側面口縁部付近から内底部へ右回転で施すものが29、左回転で内底部と内側面を区別して施すものが31である。すべて外側口縁部にも暗文が若干施される。28は口径12.0cm、器高4.3cm、高台径3.7cmをはかる。29は口径12.0cm、器高3.7cm、高台径4.0cmをはかり、外側面下位に径0.8cmの竹管状の押圧痕を残すものである。30は口径11.9cm、器高4.0cm、高台径4.6cmをはかる。31は口径13.1cmと他のものよりやや大振りで、器高4.1cm、高台径4.4cmをはかる。高台は外底部中心をややずれて貼付けられたものである。瓦器皿(32)は口径9.3cm、器高1.7cmをはかり、摩滅のため淡褐色を呈する。底部中央に径0.4cmの穿孔がある。内底面にはジグザグ状の暗文がみられ、口縁部はヨコナデ調整により外反する。33は土師器大皿であるが、厚さ0.8cmと厚手で口縁部を「て」字状に折りまげ、他のものとは明らかに異なるものである。復元口径は13.0cm程度であり、内底面に黒漆と思われるものが少し付着する。34は東播系須恵器こね鉢である。口縁部の破片であり、破断面がやや摩滅している。色調は淡灰色を呈し、器壁は厚さ0.6cmと薄いものである。35は平瓦である。凸面は縄目のタタキ痕を、凹面は布目痕を残すものであり、側面は丁寧に面取りをおこなう。焼成はやや甘く、灰白色を呈する。破片のため全容は不明であるが、厚さは1.7cmをはかる。凸面の拓本を示した。36は上釜である。口径28.2cm、胴径31.2cm、残存高7.8cmをはかり、淡褐色に発色するものである。口縁部を「く」字状に折りまげ、端部を上につまみあげるものである。胴は厚さ0.8cm、幅約2.0cmをはかり、ほぼ水平に貼付けたものである。口縁部・胴ともにヨコナデ調整により仕上げられており、内側面は当て具痕を残す。保存状態は悪い。第1層からは以上の土器以外に東播系須恵器甕、二次焼成を受けた瓦器椀・土釜などが出土している。

第2層出土土器(第17区)は37~50、57である。43は土師器大皿であり、口径13.6cm、器高1.9cmをはかる。暗褐色を呈し、第1層出土の4と同形態のものである。土師器小皿(37~42)は口径8.6~9.3cm、器高1.3~1.5cmの範囲に収まり、口径が第1層出土のものよりやや大きい傾向がある。すべて外底部は指押えで内外の側面はヨコナデ調整で仕上げるものである。赤褐色に発色するものは37・38であり、褐色系のは39~42である。底部は平底であり、口縁部の形態は38・39が外反、37・40~42が端部をつまみあげるものである。44は土師器椀である。口径9.0cm、器高4.5cm、高台径4.7cmをはかり、淡褐色を呈するものである。口縁部はヨコナデ調整により小さく玉縁状におさめてある。瓦器椀(45~49)は第1層と同じく川越編年III-C・D(近江編年I-7・II-1)に対応するものである。すべて口縁部が外反し、口縁部内側に沈線を施すものである。高台は断面三角形のものが貼付けられ、色調は黒灰色を呈する。暗文は内側面から内底部へ一息に右回転で施すものは45~47・49であり、48は内側面と内底部を区別して磨くものである。外側口縁部にもすべて暗文が施されている。46は外側面に成形時の粘土継接合痕を、47~49は重ね焼痕を観察できる。47は高台が外底部面より上に貼付けられており、外底部面が接地し不安定なものである。50は瓦器皿である。口径8.9cm、器高1.7cmをはかり暗灰色に発色する。内底部に



第17图 遗物实测图3

ジグザグ状の暗文を施している。57は上釜である。口径30.0cm、胴径33.2cm、残存高6.4cmをはかり淡褐色に発色するものである。口縁部を「く」字状に折まげ、端部を上につまみあげるものである。胴は厚さ0.8cm、幅約2.0cmをはかり、ほぼ水平に貼付けられたものである。口縁部・胴部ともにヨコナテ調整で仕上げられており、内側面は当て具痕及び横方向のハケ調整がみられる。第1層出土の36と類似しており、保存状態は良好である。第2層出土土器は以上の土器以外に凸面に離れ砂が付着した平瓦などが出土している。

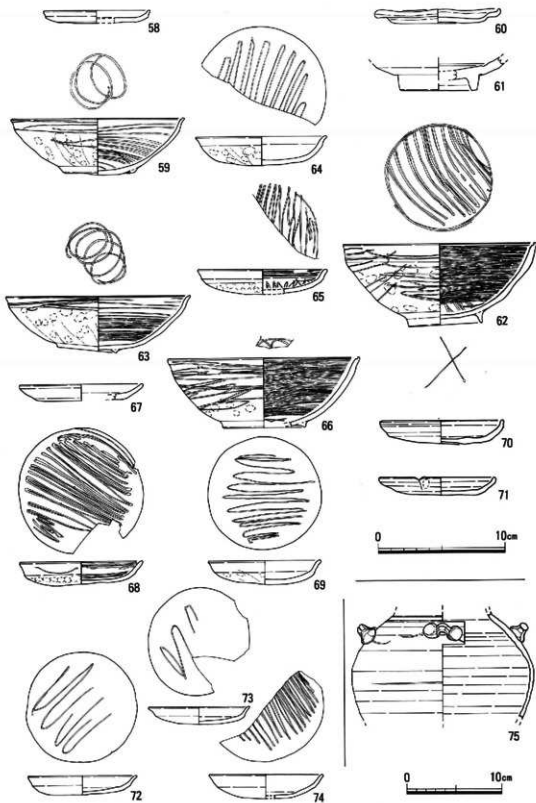
第3層出土土器(第17図)は51~56である。土師器小皿(51~53)は口径9.0~10.2cm、器高1.4~1.7cmの範囲であり、第2層出土のものよりやや大きい傾向がある。調整等は第1・2層出土のものと同様であり、すべて褐色系のものである。口縁部の形態は51・52が外側にのびて自然とおわるものであり、53は端部を上につまみあげるものである。瓦器碗(54・55)は、これも川越編年III-C・D(近江編年I-7・II-1)に対応するものである。形態的には第1・2層出土のものと同様であるが、55は高台径3.6cmと小さく、底部中央からややずれた位置にあり、外底面が接地し不安定なものである。暗文は54が内側面から内底部へ右回転に、55は内底部から内側面へ右回転に施す。瓦器皿(56)は口径8.3cm、器高1.6cmで黒灰色を呈し、内底面にジグザグ状暗文を施すものである。

以上の出土遺物、特に瓦器碗の年代観からSE-03は13世紀中頃~後半代にその埋没時期を推定することができる。

その他の遺構出土土器(第18図)

SE-02から土師器小皿(58)、瓦器碗(59)、上釜、中国製褐釉四耳壺などが出土している。58は口径8.4cm、器高1.0cmでヨコナテ調整により口縁端部を少し外反させるものである。59は口径13.7cm、器高4.5cm、高台径5.5cmをはかり、内面の暗文は側面と底部を別に施している。内底部の暗文は渦巻状に左回転で2周半施すものである。外側面は指頭圧痕が残り、口縁部から側面中位まで暗文を施すものである。

SE-04からは土師器小皿(60)、瓦器碗(62)、上釜、須恵器壺、中国製白磁碗(61)などが出土している。60は完形で口径10.0cm、器高1.2cmをはかり、口縁端部を「て」字状に折りまげた、いわゆる京都系の土師器小皿である。内底面中央に黒漆状のものが付着している。62は口径15.3cm、器高6.5cm、高台径5.7cmをはかり、黒灰色を呈する瓦器碗である。高台は底部中心をややずれるが、細く高いものが貼付けられる。暗文は内側面と内底部を別に施し、内底部に先ずジグザグ状の暗文を、その後内側面に内底部周辺から内側面口縁部にかけて密な暗文を施す。外側面は3分割に側面下位まで雑に暗文を施す。外底部高台内に、何か月印のようなものが焼成後十字に刃先状のものとで切れ目をいれる。川越編年I-C(近江編年I-2)に属するものと思われる。61は高台径6.1cm、残存高2.6cmをはかる白磁碗である。太宰府編年案のV類にあたり、透明度の高い釉を内面に施軸するものである。以上、SE-04は瓦器碗(62)や中国製白磁碗(61)の年代観から11世紀後半頃に埋没時期を推定することができる。



第18图 遗物实测图4

P-01からは完形の瓦器椀(63)が1点出土している。口径14.6cm、器高4.4cm、高台径4.6cmをはかり、黒灰色を呈するものである。川越編年III-B(近江編年のI-6)に属するものと思われる。高台は外底部中央をややずれるが、安定して接地する。暗文は内側面と内底部を別に施す。内底部は渦巻状に5回転、内側面は右回転に施す。外側面口縁部に雑な暗文を施すものである。P-01はS B-03を構成する柱穴であり、出土状況から63はS B-03廃絶時に入ったものと思われる。

P-02から瓦器皿(64・65)、瓦器椀(66)などが出土した。64は口径10.4cm、器高2.3cmをはかり、口縁端部をヨコナテ調整で外反させるものである。内底面にジグザグ状の暗文を施す。65は口径10.3cm、器高2.0cmをはかり、64同様口縁端部を外反させるものである。内底面にジグザグ状の暗文を、内側面にも暗文を施すものである。64、65ともに黒灰色を呈する。66は口径15.2cm、器高5.5cm、高台径6.5cmをはかり、黒灰色を呈する瓦器椀である。川越編年II-B(近江編年I-4)に属するものである。暗文は内側面と内底部を別に施すものであり、内底部は螺旋状の暗文、内側面は密な暗文を施す。外側面下位まで雑な暗文が施される。P-02はP-01同様S B-03を構成する柱穴であり、出土土器は出土状況からS B-03建設時に柱堀方内に埋納もしくは投棄した土器であると考えられる。

P-03から土師器小皿(67)瓦器皿(68・69)、瓦器椀、土釜などが出土している。67は口径9.8cm、器高1.3cmをはかり、淡赤褐色を呈するものである。瓦器皿(68・69)は口縁端部を外反させ内底面にジグザグ状の暗文を施し、黒褐色を呈するものである。68は口径9.7cm、器高1.8cmをはかり、69は口径8.9cm、器高1.9cmをはかるものである。

調査区中央微低地部分を埋め立てた整地土とみられる第4層からの出土土器は、土師器小皿(70・71)、瓦器椀、瓦器皿(72-74)、土釜、東播系須恵器こね鉢・甕、平瓦など多量の土器が出土した。土師器皿(70・71)はヨコナテ調整により口縁端部を上につまみあげるものである。70は口径9.8cm、器高1.9cmをはかり、淡赤褐色に発色するものである。71は口径9.3cm、器高1.3cmをはかり、淡褐色を呈する。外側面に成形時の接合痕、もしくは製作途中の補修痕を残す。瓦器皿(72-74)はヨコナテ調整により口縁端部を外反させるものであり、黒灰色に発色するものである。内底面にはジグザグ状の暗文を72・73は雑に、74は密に施している。72は口縁端部に成形時の粘土継目痕を残し、73は外底部に明瞭な指頭痕を残すものである。共作する瓦器椀は川越編年III-B(近江編年I-6)にあたるものが最も新しいタイプのものである。また、第4層からは二次焼成を受けた埴土なども出土している。

75は中国製の褐釉四耳壺である。小溝群下のピットから出土したもので、口縁部と底部を欠くものであるが、胴部最大径19.0cm、残存高11.6cmをはかる。器壁の厚さが約0.5cmと薄手のもので、胎土には少量の砂粒をふくむが緻密な土である。胎土は赤褐色に発色し、自然釉かもしれないが黄褐色の釉が外面及び内面に部分的にたれているものである。器壁側面内外にはロクロによるマキアゲ底が明瞭に残る。外側面胴部最大径付近にはヘラ状工具による沈線が1条施される。また割付のためか、耳を貼付ける前に外側面肩部に同じく沈線が1条波状に施される。その波状沈線

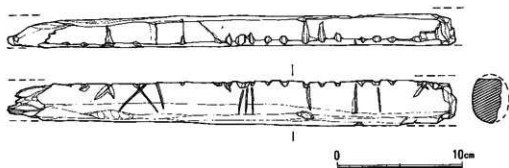
上に横方向に耳が貼付けられる。類例から耳は4単位付くものと思われ、鎌倉時代中期頃のものと考えられる。接合しないが、SE 02出土品と同一個体であると思われる。

以上、遺構を中心に出土土器を説明したが、これら以外のピットや溝などからも瀬戸灰桶壺、常滑こね鉢・甕、東播系須恵器こね鉢などが出土している。

木製品 (図版17・18)

木製品はSE-03から多量に出土した。aはほぞ穴をあけた建築材である。両側辺は破損しているが残存長約36.0cmをはかる。断面長方形であり、長辺約6.0cm、短辺約4.0cmをはかる。長辺側の面にはほぞ穴が切っており、ほぞ穴は長辺3.3cm、短辺1.6cmをはかり、貫通する。bは板である。現況では長辺31.7cm、短辺6.8~7.7cmの長方形を呈するが両長辺側が破損して失われている。短辺側はそれぞれ1ヶ所ずつ径0.1cm程の釘穴を残す。板の厚さ0.6cmをはかる。c・dは曲物の底板である。cは直径31.0cmの底板の一部であり、4~5枚組み合わせて底板を構成したものである。厚さ0.8cmをはかるものである。dは小形曲物の底板である。隅丸方形の一部であり、厚さ0.6cm、残存長7.2cm、残存幅5.8cmをはかる。eは箸と思われる木製品であり、両端部を破損しているが断面楕円形で長径0.6cm、短径0.4cm、残存長19.5cmをはかる。

特筆すべきものに、SE-03第3層から出土した「棒はかり」状木製品がある。(第19図、図版18-a) 両端部を欠損しているが、残存長35.8cmをはかる。上面と背面も欠損しているが、復元するならば断面楕円形で長径3.8cm、短径2.9cmと推定できるものである。上面には幅0.2~0.3cmの鋸状の工具でひいた様な切込みを17単位残している。また正面側には刃先でつけた様な切れ目が「×」や「川」などの記号状につけられており、背面側の剝離面にも切傷状の切れ目が数ヶ所観察できる。上面を「上目」、正面を「前目」にあてれば「棒はかり」の可能性はある。本例は鎌倉時代中期のものであることが共存する土器から明らかであるが、現在までに民俗例及び発掘出土例などで中世例が確認されたことはなく、今後類例資料の増加を待つて検討が必要である。類例資料で最も年代に近いものに大阪城・大坂夏の陣(1615年)の焼土層から出土した象牙製の銀



第19図 SE-03出土「棒はかり」状木製品(S=1/3)

用棒はかりがある。

SE-03出土品以外ではSE-02から出土した漆器桶がある。この漆器桶は外側面に黒漆地に朱色の草花文を表現したものである。保存状態は悪い。また、P-04、-05などから柱が出土している。

(図版18-b、c) bはP-04出土で根元は斧で切断されたままである。cはP-05出土で根元は鋸で切断されている。b・c共に側面は手斧で縦方向に荒削りした痕跡を観察することができる。bは直径12.3cm、残存長40.7cm、cは直径12.2cm、残存長47.7cmをはかる。

石製品、自然遺物

石製品では、小溝から砂岩製の砥石が出土している。また製品ではないがサヌカイトチップが包含層から少量出土している。掘立柱建物を構成する柱穴の多くから根石が出土しており、そのほとんどが花崗岩系の河原石である。なかには片岩系のももあり、SB-01の北東隅ピットからはいわゆる榊原石の切石が用いられていた。これらの柱穴根固め石の中には上面に火を受け、ススが付着するものがみられる。

自然遺物では、SE-03・04などからモモやウリの種子が少量出土している。

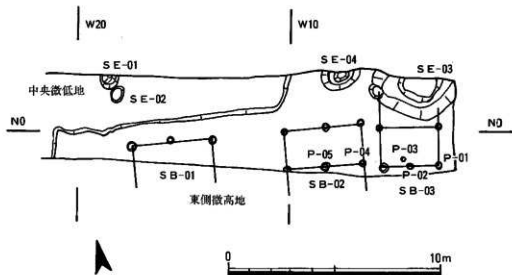
参考文献

- 田辺昭三 『須恵器大成』 角川書店 1981年
- 横田賢次郎・森田 勉 『太宰府出土の輸入中国陶磁器について』(『九州歴史資料館研究論集第4集』1978年)
- 川越俊一 『大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題』(『文化財論叢』奈良国立文化財研究所 1983年)
- 近江俊秀 『大和型瓦器桶の編年と実年代の再検討』(『古代文化第43巻第10号』(財)古代学協会 1991年)
- 横田洋三 『土師器皿の分類と編年観』(『平安京左京四条三坊十三町』平安京跡研究会調査報告書第11輯 古代学協会 1984年)
- 岩田重雄 『近世における質量標準の変化』(『計量史研究vol.1 NO1』日本計量史学会 1979年)
- ” 『中国における尺度の変化』(『計量史研究vol.1.NO2』日本計量史学会 1979年)
- ” 『中世における質量標準の変化』(第11回計量史をさぐる会発表要旨日本計量史学会 1988年)
- 小泉装袿勝 『ものと人間の文化史48 粋』法政大学出版局 1982年
- 藤原俊次 『中世衝刺史への一視点 - “チギ”の語源に関して-』(『京都市歴史資料館紀要第2号』京都市歴史資料館 1985年)
- 宮本佐知子 『大坂城跡出土の粋と鉢』(『大阪市文化財情報 兼火 12号』(財)大阪市文化協会 1988年)

IV. まとめ

1. 千代遺跡の遺構変遷

千代遺跡検出の中世遺構について、その時期的変遷を説明する。中世において、もっとも古い時期の遺構としては西側微高地のピット群である。これらのピットは平安時代のものであると思われるが、時期的にどこまで遡れるのかは明確ではない。しかし、これらのピットを切り掘削される小溝群は出土遺物から平安時代末期のもので、ピット群はそれより以前のものであるといえる。またピット群と同時期に存在したと考えられる井戸（SE-04）を東側微高地で検出した。SE-04は出土遺物から11世紀後半頃の埋没であると考えられた。SE-04廃絶後、当調査地を含む周辺地は農耕地となった様で、南北あるいは東西方向の小溝が多数掘削される。言い換えるならば、当地周辺は平安時代末期に耕地開発され、新たに農耕地となった場所であるといえる。また、それにとまって東・西微高地及び中央微低地などの微地形が形成されたものと考えられる。その後、東側微高地部分に孤立柱建物（SB-03）が建てられた。柱穴堀方（P-02）内の出土遺物からみて12世紀中頃にその建設時期が推定でき、廃絶時期は柱穴抜取り穴（P-01）内の出土遺物から13世紀前半頃が考えられる。SB-03と同時期に存在したと考えられるものにSE-02がある。SB-03廃絶後、その西側に孤立柱建物が2棟（SB-01、02）建てられる。SB-01・02は東側微高地の地形にその軸を揃えて並んで建てられており、その廃絶時期は中央微低地が埋め立てられる時であると考えられる。中央微低地を埋め立てた整地上（第4層）からの出土遺物の時期は13世紀中頃を示し、SB-01、02は共に短期間の存続であったものといえる。その後SE-01、03が掘られる。双方とも出土遺物から13世紀後半頃にその埋没時期を求めることができる。整地土（第



第20図 中世の主要遺構配置図

4層)やS E-03から平瓦が出土することや柱の沈下防止に根石を用いることなどからS B・01-03は瓦葺建物であった可能性がある。S E-01, 03が埋没後、再び当調査地周辺は農耕地となり現在に至る。

2. 千代遺跡の性格

千代遺跡の南側に「日光寺、極楽、今堂、中殿」など寺院に関する小字名が残存していることは先にも述べた。また、これに加えて、調査で検出された掘立柱建物(S B-01-03)が瓦葺建物であった可能性があり、当調査地が寺院の一角であった可能性を考えることができる。

文献史料についてみると、現千代あたりに推定される「千代庄」関係では、寛弘七年(1010)の「東大寺牒」の「香業莊園」の十市郡内に「千代庄」が初見される。また弘安八年(1285)の「東大寺注進状案」の「東大寺顛倒所之事」のなかにも「千代庄」がみられ、売却・横領などにより東大寺領としては崩壊の動きがうかがえるときれる。以上の「千代庄」は東大寺領荘園である。しかし、応永六年(1399)の「興福寺造営料大和国八郡段米田数注進状」の十市郡に「大乗院方 千代庄十一町三段半」とあり、寛正四年(1463)の「諸庄段銭成足帳」の十市郡にも「千代十一丁二反半」と記載があり、これらの「千代庄」は興福寺大乗院領荘園と考えられる。単純に考えるならば、ここにいう「千代庄」は11世紀初頭までに成立し、当初東大寺領であったが13世紀後半に同寺領としては崩壊してしまい、これに代わって(?)14世紀末頃から15世紀中頃までは興福寺大乗院領となっていると解釈できる。しかし、これらの文献にみられる「千代庄」の正確な位置が明確でないことなどから、この解釈は可能性としての域をでるものではない。

ところで、「千代庄」以外では、当調査地が城下郡路東十八条一里に条里復原されていることから、延久二年(1070)の「興福寺雑役免坪付帳」に記載のみえる「八条南庄」が周辺地に存在したものと考えられる。「八条南庄」は「八条庄」北・中・南3庄のうちのひとつであり、「八条南庄 二十四町三反六十歩 不輪免田畠十八町一段 公田畠六町二段六十歩」とみえる。それによると、この荘園のうち「中宮大夫位田二町五段半」が十八条一里、同二里にあったと記載されている。「八条庄」については、嘉禄三年(1227)の「六波羅下知状」に「八条庄」に地頭が設置されたことが記されている。以上のことから、「八条南庄」の記事が初めてみられるのは11世紀後半であり、当調査地周辺が農耕地として開発された時期と符合するものである。また、地頭が「八条南庄」を含む「八条庄」に設置されたという記事は13世紀前半頃であり、当調査地の掘立柱建物の存続時期と重なり興味深い。

参考文献

- 桐舎 弘 「個別荘園」(『田原本町史 本文編』田原本町史編さん委員会編 1986年)
奈良県立橿原考古学研究所編 「大和国条里復原図」1980年

千代遺跡

図 版



千代遺跡 全景（北西から）



調査前の状況（東から）



調査地 全景（上が北）



SD-101 (北東から)



SB-01、SB-02 (東から)



S B-03 (南から)



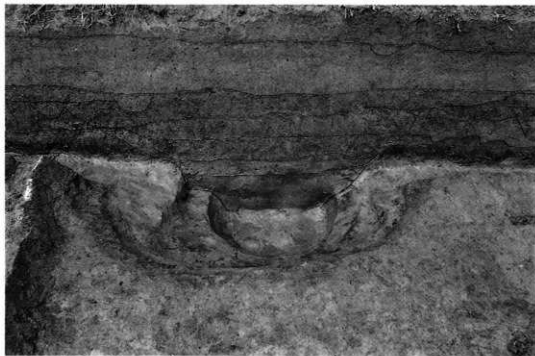
S E-01、S E-02 (南から)



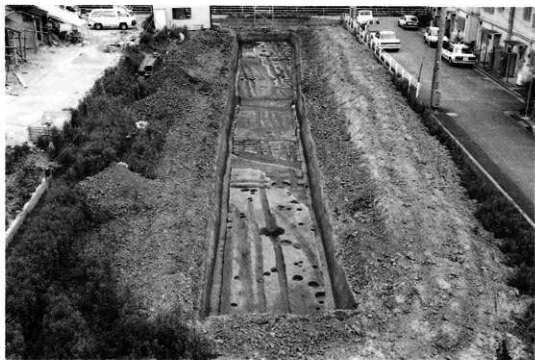
SE-03 (東から)



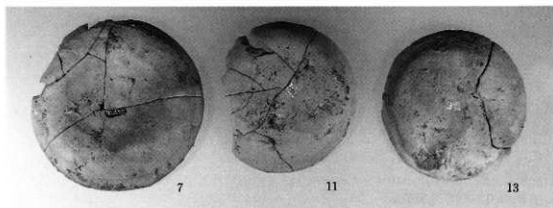
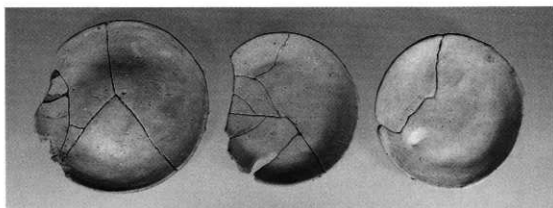
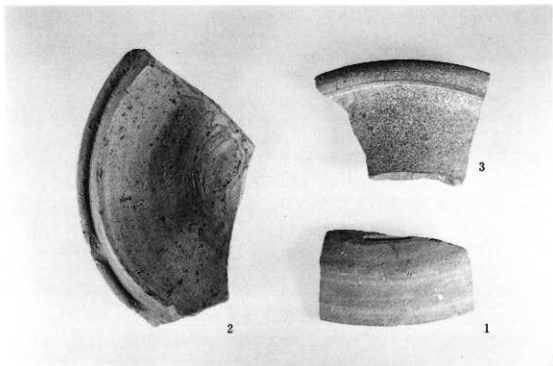
SE-03上面遺物出土状況 (東から)



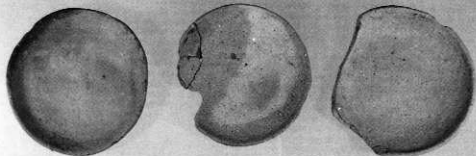
SE-04(南から)

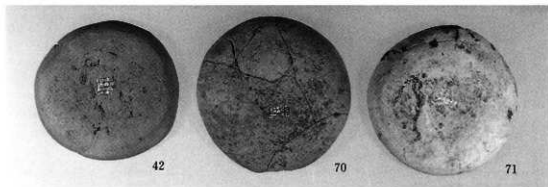
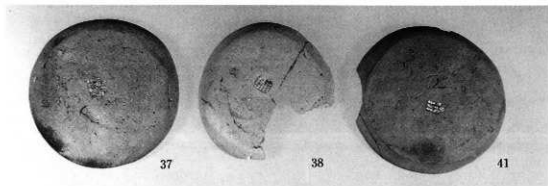
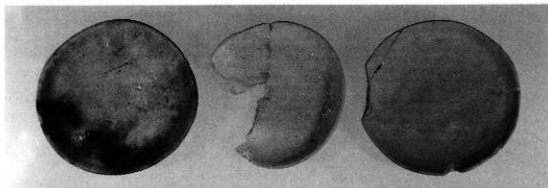


遺構完掘状況 (西から)

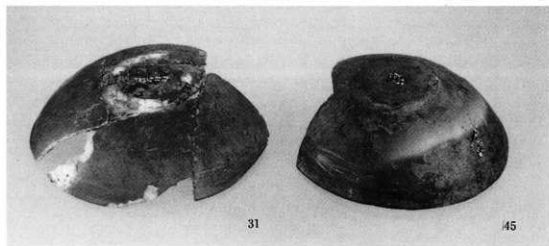
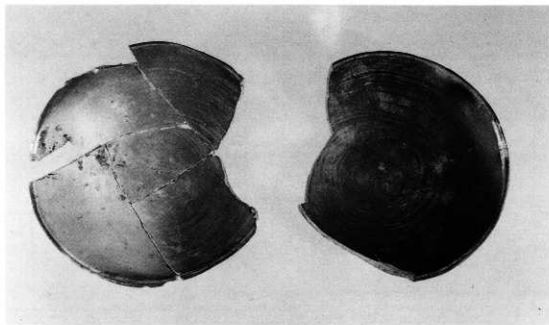


1~3 SD-101出土遺物 須恵器、7・11・13 SE-03出土遺物 土師器皿

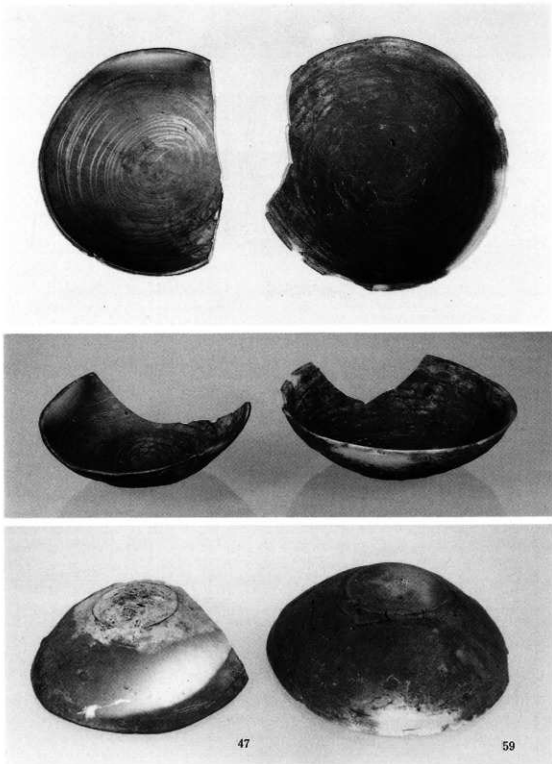




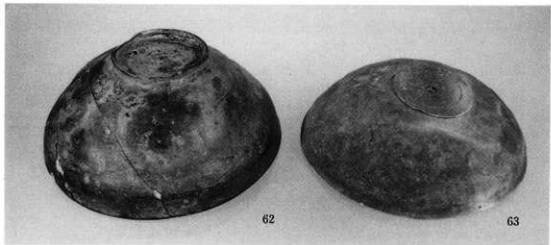
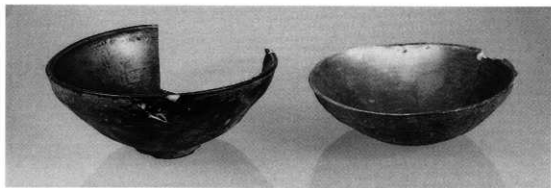
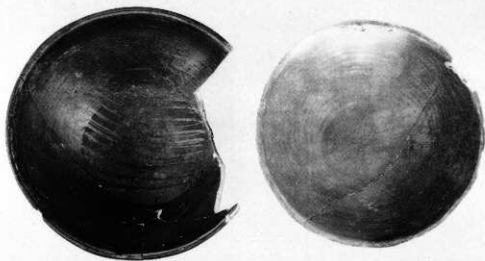
37・38・41・42 S E-03出土遺物 土師器皿、 70・71 第4層出土遺物 土師器皿



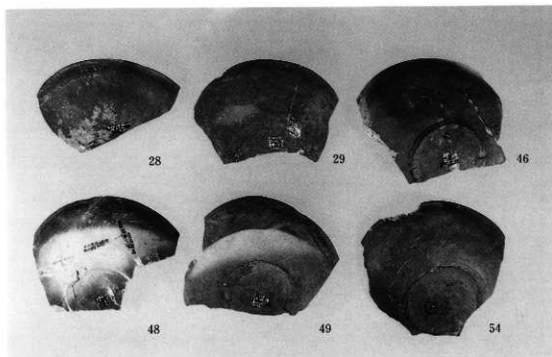
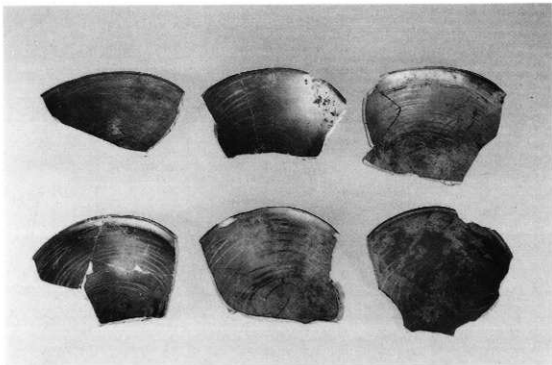
SE-03出土遺物 瓦器碗



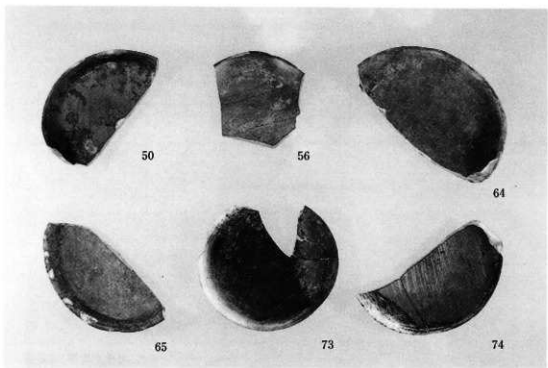
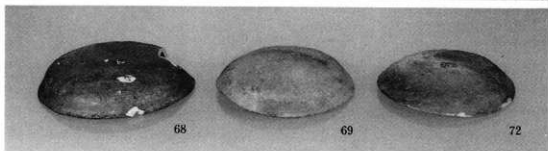
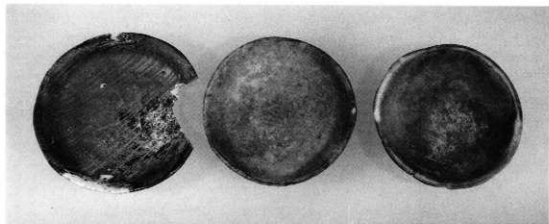
47 SE-03出土遺物 瓦器碗、59 SE-02出土遺物 瓦器碗



62 SE-04出土遺物 瓦器碗、63 P-01出土遺物 瓦器碗



SE-03出土遺物 瓦器碗



50·56 S E-03出土遺物 瓦器皿、64·65 P-02出土遺物 瓦器皿
68·69 P-03出土遺物 瓦器皿、72·73·74 第4層出土遺物 瓦器皿